



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高校三者協議会の意義と可能性：北海道の2つの高校の事例調査を通して
Author(s)	横井, 敏郎; 辻村, 貴洋; 安宅, 仁人 他
Citation	公教育システム研究, 5, 1-43
Issue Date	2006-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/20513
Type	departmental bulletin paper
File Information	01-pess5.pdf



高校三者協議会実践の意義と可能性

—— 北海道の2つの高校の事例調査を通して ——

横井 敏郎¹⁾・安宅 仁人・辻村 貴洋²⁾・渡辺 宏輝³⁾・角幡 草太
・小沼 由梨香・佐々木 瑛・佐々木 耕太・佐々木 聡・菅原 紫・中西 希恵⁴⁾

目次

序章 調査課題と概要	横井 敏郎
1 なぜ三者協議会に注目するか	
2 学校づくりと三者協議会——先行する事例から	
3 調査の対象と概要	
第一部 白老東高校三者協議会の事例研究	
1 白老東高校「三者懇談会」の設置と協議経過	
(1) 町と高校の概要	安宅 仁人
(2) 設置の経緯	佐々木耕太
(3) 協議経過と生徒の要求	佐々木耕太
2 白老高校「三者協議会」の現在	
(1) 「三者懇談会」から「三者協議会」へ	佐々木耕太
(2) 第12回「三者協議会」観察記録	菅原 紫
(3) 第13回「三者協議会」観察記録	角幡 草太
(4) 教頭・教員の「三者協議会」評価	渡辺 宏輝
(5) 保護者・生徒の「三者協議会」評価	佐々木 瑛
3 まとめ	角幡 草太
(1) 三者協議会は何をもたらしたのか	
(2) 白老東高校「三者協議会」の課題	
<表> 白老東高校三者懇談会・三者協議会の協議経過	
<資料> 白老東高校「三者協議会」会則	
第二部 美瑛高校三者協議会の事例研究	
1 美瑛高校「三者懇談会」の設置と協議経過	辻村 貴洋・小沼由梨香
(1) 町と高校の概要	
(2) 設置の経緯	
(3) 協議経過と生徒の要求	
2 美瑛高校三者懇談会の現在	
(1) 「三者懇談会」から「美高フォーラム」へ	中西 希恵・小沼由梨香

1) 北海道大学大学院教育学研究科助教授
2) 北海道大学大学院教育学研究科博士課程3年生
3) 北海道大学大学院教育学研究科修士課程1年生
4) 北海道大学教育学部3年生

(2) 第5回「美高フォーラム」観察記録	中西 希恵
(3) 第6回「美高フォーラム」観察記録	角幡 草太
(4) 生徒、保護者、教員の「美高フォーラム」評価	佐々木 聡
3 「美高フォーラム」の意義と課題	辻村 貴洋
終章 三者協議会実践の発展方向	
1 2つの実践のまとめ	安宅 仁人
(1) 白老東高校「三者協議会」	
(2) 美瑛高校「美高フォーラム」	
2 2つの実践の比較から	
(1) 実践の軸足の置き方	安宅 仁人
(2) 三者協議会の発展方向	横井 敏郎

キーワード：高校、三者協議会、フォーラム、生徒の意見表明、学校参加

序章 調査課題と概要

1 なぜ三者協議会に注目するか

今回、私たちは児童・生徒、保護者、教師が集い、学校のあり方について協議を行う取り組みである三者協議会の事例調査を行った。まず三者協議会に注目した理由を簡単に述べておこう（注：本稿でいう三者協議会とは、三者協議会の他に三者懇談会やフォーラムなどさまざまな名前で呼ばれ、児童・生徒、保護者、教師の三者が何らかの形で対話をする場、組織を広く指している。また地域住民が参加した四者協議会も含むものとして、本稿の三者協議会という言葉を用いている）。

戦後教育行政構造は、〈文部省—教育委員会—学校〉ラインによる官僚統制が貫徹しており、とりわけ1956年の「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の制定とその後の勤評闘争以降、学校と教育委員会は閉鎖的な運営・行政が実施されるようになった。文部省による支配が担保されるように法的整備がなされるとともに、フォーマル、インフォーマルに組織された機関・団体が国の文教行政の実施を支える体制が生み出され、そうした体制下において学校と教育行政の文化は中央志向的で閉鎖的かつ儀礼的なものとなっている。臨教審以降こうした中央集権的で閉鎖的な学校・教育行政のあり方は次第に批判を浴びるようになり、1990年代以降は規制緩和政策や地方分権改革も推進されたが、いまだその閉鎖性や中央集権性はいまだ払拭されたとはいえない。

学校と教育行政をいかに市民の手に取り戻すかが依然として課題である。そのためには〈文科省—都道府県教育委員会—市町村教育委員会—学校〉の関係構造を統制的なものから、それぞれが自律性をもった対等な関係に、また各レベルを住民や当事者による参加を取り入れた民主的な決定組織に変えていく必要がある。対等とはそれらの間に協議を持ち込み、あるレベルが別のレベルの内部組織のような関係に陥らないようにするとともに、適切に上位組織から支援を受けられる関係になることであり、まったく他レベルと関係をもたない自立を強制することではない。また民主的決定とはその組織に関係する

者の対話を通じて決定を図ることである。いずれのレベルでも、レベル間でも十分なコミュニケーションを行うことが求められる。

学校レベルでの民主的決定を考えた場合、1つは職員会議の位置づけが重要になるが、それが専門職支配に陥らないようにするためには生徒、保護者、地域住民の参加が不可欠である。それぞれの主体の参加のためには、生徒会、PTA、学校評議員制度があるが、十分に機能していない場合が多い。それは、これらが学校行事等の下請け的な役割を負わされたり、学校の意向等を連絡するための組織となっていたりして、学校を構成する自律的な主体としての地位を十分に獲得しておらず、またこれらの間には連携がなく学校側によって個別にタテ関係で掌握されているからである。現状制度のもとでこうした状況を乗り越えるための改革を考えると、これらの組織の間にヨコの連携関係を作り出すことと学校側との間に協議を持ち込むことが1つの方法として検討されてよかろう。三者協議会はまさに生徒や保護者との連携を生みだし、学校側との協議をシステム化する可能性をもっている。そしてこれが学校改善、学校づくりにつながっていくはずである。

また、今日の子ども・若者の成長の困難の克服という視点からも、三者協議会は注目に値する。今日の子ども・若者の成長の困難はさまざまな側面から語られるが、「学びからの逃走」といわれる勉強しない子どもの増加や不登校・高校中退の増加、いじめや人間関係づくりの困難、市民道徳にもとる子どもたちの振る舞いなどは多くの大人たちが感じる問題である。これらは、子どもの側に要因があるわけではなく、大人にも共通する社会問題であるという認識が重要であり、そうした認識に立って社会のあり方自体を問い返すことがまず必要である。しかしそれとともに、子どもたちが他者や異世代との関係づくりを学び、また社会のあり方を論じ、社会を作りかえていく力を獲得する機会を用意することが求められる。そうした機会はさまざまな内容でもって広範に用意されねばならないが、学校においても、子どもたちは単に教え込まれる存在としておかれるのではなく、自立的に行動することを学ぶ機会が子どもたちに与えられねばならない。三者協議会は、子どもたちにとって広い意味での市民性教育の機会として位置づけることが可能である。

このように、三者協議会は、学校レベルでも民主的決定システムとして、また子どもたちの市民性形成の機会として、注目に値するのである。

2 学校づくりと三者協議会——先行する事例から

三者協議会が一定の注目を集めるようになったのには、長野県の辰野高校の取り組みが大きな役割を果たした。同校の取り組みは、浦野東洋一氏が長く参与観察を行い、同校を取り上げた執筆活動によってその意義を説いたことが、その知名度の上昇に大きくあざかったと思われるが、もちろんその取り組み自体に今日の教育課題に迫る内容と成果があったからこそ、それは多くの人々に知られるようになっていったといえよう。

同校の取り組みについては、これをリードした教員宮下与兵衛氏が『学校を変える生徒たち——三者協議会が根づく長野県辰野高校——』（かもがわ出版、2004年）を著しているので、それを読まれることを願い、ここでは浦野氏が宮下氏の書物に寄せた「解説」を参照して、三者協議会の意義について確認しておく。

浦野氏は、この「解説」で11個の「客観的な知見」をあげている。①子どもの参加、子どもを中心に据えることが決定的に重要、②二者よりも三者、三者よりも四者の方が面

白く効果的、③話し合いのテーマは、施設・設備から授業・学力・進路へと発展する、④学校と地域との関係が「双方向の協力関係」へと発展する、⑤開かれた学校づくりの中で「明るく楽しい学校評価、授業評価、教員評価」が可能になる、⑥子どもの意見表明権を保障するとともに、その能力をトレーニングする機会となっている、⑦三者協議会は事実上の決定機関としての役割を果たしている、⑧生徒たちが地域（現実の社会）の課題に関心を持ち、住民と交流することの重要性、⑨当事者間に対等平等の感覚（センス）が広がっている、⑩三者協議会は学校の「公共性」（みんなのもの）を担保している、⑪学校を開くと教職員は「楽」になる。

これらの「知見」は平易な言葉で書かれているが、さまざまな重要な示唆を与える含蓄のあるものである。特に本稿で、注目したいのは、三者協議会は、学校的意思決定機関として事実上機能しているが、単に学校的意思の決定機関や子どもの意見表明の機会として存在しているだけでなく、学校が地域と関係をもつようになることで子どもたちの成長や学びを豊かにし、学校づくりに大きな役割を果たす存在となりうるという点である。実際辰野高校では、三者協議会で授業や教育課程のあり方にまで議論が及び、結果として総合選択制という新しい制度の導入にまで進んでいった。前項で述べたような民主的決定や子どもの市民性の形成という点をいくら言っても子どもたちの学びの内容が豊かにされなければその意義は半減するが、先行事例からは当事者参加の学校づくりが学びの豊富化にまでつながっていることが重要である。ここにまた三者協議会に私たちが注目する理由がある。

3 調査の対象と概要

私たちは三者協議会に以上のような観点から関心を持ち、事例調査を行うこととした。北海道には200校を超える数の公立高校がある。ここ数年の間に10校程度の公立高校で三者協議会が行われ始めているが、全体の中ではわずかといっている状況であり、1、2度実施しても、なかなか定期開催が難しく、定着しないケースも見られる。

しかし、全国的には三者協議会は現在教職員や研究者の間で一定の注目を浴びており、北海道でももう少し増え、ネットワークが形成されれば1つの潮流を形成することにもなる。

今回私たちが事例として選んだのは北海道白老東高校と北海道美瑛高校の2校である。

白老東高校は、北海道で最も早く三者協議会に取り組んだ学校であり、10年に及ぶ蓄積がある。私たちはまず同校に着目した。同校がどのようにして三者協議会を始め、どのような内容で実施され、学校や生徒をどう変えているのか、また課題は何か。

同時に、もう1つ、フォーラムという形式を取っている美瑛高校の三者協議会も調査対象に加えた。同校は比較的最近に三者協議会を開始したが、その経緯や内容、フォーラムを採用している意味、そして白老東高校との違いなどを検討したいと考えた。

本報告書はこの2つの高校の事例を調査してまとめたものである。

調査の経過は以下の通りである（すべて2005年に実施）。



- 5月23日 前北海道白老東高校教諭 飯塚正樹氏（生徒会担当）インタビュー
6月16日 美瑛町教育委員会教育長 加藤征和氏インタビュー
北海道美瑛高校教頭 川邊洋一氏インタビュー
北海道美瑛高校教諭 浪岡知朗氏（生徒会担当）インタビュー
6月17日 北海道白老東高校「第12回三者協議会」視察・参加
参加教員・保護者・学校評議員アンケート
参加生徒アンケート
6月26日 北海道美瑛高校「第5回美高フォーラム」視察・参加
参加生徒・保護者・住民・教員アンケート
9月29日 北海道白老東高校教頭 西谷内隆幸氏インタビュー
同校教諭 木村和平氏・落合良子氏（事務局担当）インタビュー
同校生徒会 前会長・現会長・現役員インタビュー
11月26日 北海道美瑛高校「第6回美高フォーラム」視察・参加
12月17日 北海道白老東高校「第13回三者協議会」視察・参加

第一部 白老東高校三者協議会の事例研究

1 白老東高校「三者懇談会」の設置と協議経過

(1) 町と高校の概要

①白老町の概要

白老町は人口約2万2千人で、苫小牧市（人口約17万3千人）に隣接している。町の産業の状況としては、日本製紙（旧大昭和製紙）の工場があるほかは、温泉を利用した観光業と、白老牛、昆布、鱈子などの食品業とを併せ、近年行政が「観光物産プロモーション」と銘打ち産業の振興を図っている（白老町ホームページ参照）。

②白老東高校の概要

白老町内には現在2つの高校があり、1つは私立の北海道栄高校、もう1つが今回取り上げた道立の白老東高校である（なお、白老東高校の設立当時は町内に町立の「白老高校」が存立していたが、後に廃校となっている）。白老東高校は1987年に白老町の中の東部に普通高校として開校した比較的新しい学校である（開校時1学年4学級）。その後3学級となり、現在は生徒数354名（2005年度5月1日現在）が通っており、34名の教職員が勤務している。

生徒達の出身中学を見ると、白老町からの生徒が137名（37.0%）なのに対して、苫小牧市からの生徒は222名（62.7%）となっており、町外から鉄道やバスを利用して通学してくる生徒の割合の方が多く、30分以上かけて通学する生徒の割合が半数近く（167名）にのぼっている。卒業後の進路は、2005年3月卒業の生徒の場合、104名のうち48名が進学、45名が就職、残り11名が未定となっている（以上、同校平成17年度学校要覧等参照）。

(2) 設置の経緯

1998年12月、白老東高校第1回の「三者懇談会」が開かれた。参加者の数も現在と比べて少ない集まりであった。この第1回目の「三者懇談会」が開催されたきっかけは、当時のPTA副会長(子どもは生徒会長)の「今の高校生は何を考えているのか聞きたい」という一言であった。

白老東高校の「三者懇談会」の取り組みは、1997年度から7年間白老東高校で生徒会顧問として活躍してきた飯塚正樹教諭が中心となって進められた。飯塚教諭が赴任当初、生徒会顧問として生徒と接する中で感じたことは「生徒が言いたいことを言えていないな」ということであったという。その当時、生徒会の中に、学校祭の日程を2日間から3日間にしたいという要求があった。生徒会顧問として、生徒の要求・意見を職員会議に持って行って、そこでの意見をまた生徒会役員に伝える、という繰り返しの結果、学校祭の日程が3日間になった。飯塚教諭は「ちゃんとした理由をかかげて、生徒が手順を踏んで、先生たちに要望したことが実現した経験は非常に貴重だった」と述べている。飯塚教諭らの働きかけによって、「三者懇談会」・「三者協議会」の取り組みも進んでいくのである。

(3) 協議経過と生徒の要求

白老東高校の「三者懇談会」(「協議会」になる前)は、大きく分けて、第1期から第4期まで4つに分けることができる。第1期は第1回・第2回、第2期は第3回～第5回、第3期は第6回～第8回、第4期は第9回以降である。以下、司会・協議題目・参加者構成のそれぞれの変遷について、4期に分けてみていくことにする(後掲表「白老東高校三者懇談会・三者協議会の協議経過」を参照のこと)。

① 司会の変遷

第1期では教頭が司会をしていたが、第2期は、生徒会役員が司会をすることになった。第1期の三者懇談会が、生徒が親に「しゃべり倒された」という感じで終わったということを踏まえた変更である。司会、テーマなど進行方法を事前に生徒会役員の中で打ち合わせしておくことにより、できる限り生徒が言いたいことを言えるようにするためであった。

そして、生徒司会の形は3回続けられた。しかし、結局生徒が司会をすると発言する生徒が減ってしまうこと、また生徒司会では議論を整理するのが難しい場面も出てくるという問題が生じていた。そこで第3期以降は、教員3名で「三者懇談会」事務局を組織し、司会・記録等もこの事務局の教員の中で行うことになった。生徒が意見や要望を主張することに専念できるようにしたものである。

② 協議題目

白老東高校「三者懇談会」は、まず三者それぞれの考えを理解することに主眼が置かれていたため、当初は事前のテーマ設定もなく、議論の雰囲気も「保護者が生徒を励ますという感じ」であったが、第2期では主に理想とする生徒像について、テーマを設けた話し合いが行われた。テーマは事前に生徒会役員自身で決めることになった。その結果、「親、先生から聞きたいこと」をテーマにすることとした。この時期の「三者懇談会」で、制服について議論がなされているのも特徴である。第3回「三者懇談会」において、生徒会役員が行ったアンケートの結果に基づき、防寒のためのベスト・セーター・カーディガン等

の着用を認めてもよいのではという提案が出され、職員会議等で検討していくことになった。

第3期は、「三者懇談会」事務局が設けられた。第2期の、生徒会役員が事前にテーマを設定するという形では、テーマがその時々を生徒会役員の関心事項に偏ってしまうため、話し合いに継続性が見られなくなってしまうという問題点が生じていた。第3期以降は事務局が中心となって、アンケートを実施するなどし、保護者（PTA役員会）・生徒（生徒会役員）・教職員の三者の意見を踏まえたテーマ設定がなされることになった。この結果、むしろ第2期よりも生徒たちにとって「自分たちの要望を積極的に持ち込み議論する場が変わっていった」という。そして、この時期のテーマは「制服について」「携帯電話について」「授業について」などがそれぞれ数回続けられており、話し合いに継続性もたれている。後に述べる「携帯電話持ち込み」についても、第6回から第8回まで継続的に話し合いが行われ持ち込みが認められるという経過となっている。

③参加者構成

参加者構成は、当初から保護者、生徒、教員の「三者」で続いてきている。

第3期、第7回目からは三者それぞれの参加者の幅が拡大した。「先生、私たちだけが出てもしょうがないよね」という生徒会役員の発言によるものである。生徒は、生徒会役員だけではなく一般生徒が誰でも参加できることとし、また、各学年代表として2名必ず参加することとした。保護者についても、PTA役員だけではなく全保護者に案内を出して参加者を募ることになった。教員は学年主任および校務分掌の代表者は必ず参加することになった。その他、このころから制度化された学校評議員も参加することになった（この意味では部分的に地域住民も参加していることになる）。この結果、第7回以降は、総数50名前後という規模で行われている。この50人前後という規模について白老東高校の教頭は、「話せば聞いてくれるといういい大きさ」と述べている。

白老東高校の「三者懇談会」・「三者協議会」には、地域住民の参加はこれまで行なわれていない。地域住民の三者懇談会への参加に関して、宮崎前校長は「今後は地域住民にも参加してもらい、授業や行事のあり方などを幅広く議論する四者懇談会に発展させたい」（北海道新聞 2002年2月11日）と述べている。しかし、現在のところ、地域住民の参加を認めることについて教員側は必ずしも賛同していない。

④協議回数と事務局、校務分掌

当初「三者懇談会」は年1回であった。それが第2期より年2回となったのは、生徒会役員が1年間という任期中に2回懇談会を経験できるという点からである。生徒会役員それぞれが、1回目の反省を踏まえて2回目に望めるという点で、より言いたいことが言えるようになるということである。やはり年1回の開催では生徒が言いたいことが言えるのは難しいようである。「生徒を伸ばすことのできる機会」として「三者懇談会」をとらえたときに、やはり一人の生徒が数回懇談会を経験できるということは大事であろう。しかし、開催を年3回にするのは、白老東高校においては事務局教員の事務量などを考えると難しいのが現状であるという。

2001年12月に設置された事務局は、広報活動とテーマ設定の2つをその主な役割である。事務局が設置される以前に、話し合いの様子をまとめたプリントを全保護者に郵送するようになったが（第4回以降）、「三者懇談会」に参加する人数はやはり少数にとどまっ

ていた。いかにして議論の結果を全生徒・全教職員・全保護者に伝えていくかということが非常に大きな課題であり、このような広報活動が事務局の役割の一つである。もう一つは、テーマの設定である。生徒・保護者・教職員、三者それぞれの要求を取りまとめ、調整して話し合いの内容を決めるという意味で、事務局の果たす役割は重要である。なお、三者懇談会事務局の教員は、総務部から1名（「保護者の窓口」）、生徒会顧問から1名（「生徒の窓口」）、生徒指導部から1名（「教職員の窓口」）、の計3名で構成されることになっている。

2003年度より、「三者懇談会」が正式に校務分掌に位置づけられた。一般的に三者協議会の取り組みは、誰か非常に熱心な教員がいて、その教員を中心に開催されるということが多い。したがって、教員の人事異動によって三者協議会が開催されなくなってしまうということも多く見受けられる。校務分掌に位置づけられたということは、形の上ではこの「三者懇談会」が継続的に行われるようになるということの意味する。

⑤「三者懇談会」によって実現したもの

第3回の「三者懇談会」を前に、生徒会はアンケートを行った。その中で、防寒上の観点からベスト、セーター、カーディガンの着用を認めてほしいという意見が出され、第3回懇談会で提案された。その後着用の是非は職員会議および教職員と生徒の「二者協議」等で協議され、また第4回「三者懇談会」でも意見交換が行われ、2001年1月から着用が認められた。白老東高校において、「三者懇談会」の中で出た意見によって学校の中の決まりが変わった初めての例である。

なお、制服規定についてはその後の「三者懇談会」・「三者協議会」でもテーマとなっている。その議論の中で、この規定を守っていない生徒がいるという意見がしばしば見受けられる。このことは、「三者懇談会」での議論を（議論し決定させたということの意義も含めて）参加していない生徒にどう伝えていくかという課題を示している。

もう一つ「三者懇談会」を通じて学校生活の決まりが変わったこととして、携帯電話の持ち込み・使用許可がある。第6回のテーマの一つに「携帯電話について」があげられた。このころから、高校生の間でも携帯電話を持つことが一般的になっていた。「携帯電話持ち込み・使用許可」以前の白老東高校では、携帯電話の使用だけではなく、校内への持ち込みも禁止されていた。

しかし一方で、その決まりに反して携帯電話を持ち込み、場合によっては授業中にこっそり使用するというような事態が生じていた。さらにその場合、携帯電話を没収する、しないなどと教員の間で指導に差も見られ、そうした生徒指導の差に生徒たちは不満を持っていた。第6回の「三者懇談会」においては、生徒だけではなく、親の側からも携帯電話の持ち込み許可に賛成する意見が出ていた。「携帯があれば、不審な人から付きまわられた時などに身を守ることができる」などが親の側からの意見である。この第6回の「三者懇談会」の中で、携帯電話を認める方向が出てきた。

そこで、第7回「三者懇談会」に当たっては、生徒会役員は全校生徒にアンケートをとり、そのアンケートに基づいて意見交換を行った。そして、自分たちで携帯電話使用のルールとマナーを決めて生徒案として第8回「三者懇談会」に持ち込んで話し合いを行った。そして、携帯電話の校内持ち込みについて、2回の試行期間を経て、最終的に職員会議で「持ち込み・使用許可」が決定された。実に最初の「三者懇談会」から持ち込み・使用許

可まで2年近く経過していた。

⑥小括

「三者懇談会」・「三者協議会」で扱うテーマについて、最も要望を多く出すのは生徒である。そして、生徒の学校生活に直接結びつく、校則・制服・授業などのテーマが多くなっていくのは当然のことである。

「三者懇談会」では毎回同じようなテーマを扱っている、とすることができる。これについて、教頭は、「たぶん生徒は毎回変わってくるだろうし、われわれも人事異動で変わっていく、だから同じようなテーマを繰り返してやってきているのです。それはそれで私はいいと思っています…」と述べている。

しかしながら、毎回要求を出す生徒の側にしてみれば、結局何も変わらない、という気持ちになってしまっているかもしれない。要求が実現されるまでに長い年月がかかってしまう。携帯電話の持ち込み・使用許可についても、最初の要求から実に2年間の時間がかかっている。この携帯電話の事例から、学校づくりにおける「三者懇談会」の役割を検討したときに、決定までに時間がかかってしまっていた点を課題としてあげることができる。この点については、例えば小規模な話し合いの場を設けるということが考えられる（「三者」のうちの「二者」での話し合い、あるいは「分科会」など）。

もっとも、一部の人がしか参加しない「三者懇談会」での議論をどう全体に広めていくかという課題を克服するためにも、やはりただ仕組みを作ればよいというものではない。飯塚教諭は「仕組みを作るだけではなくて、基本的に、生徒に臨む教員集団の姿勢というものが一方でないと、ただの仕組みに終わってしまうと思っています」と述べている。「三者懇談会」という仕組みをつくるだけではなく、普段より言いたい意見を言い合える環境、特に生徒の声を大事にする環境をどれだけ実質的なものとして作り、維持していけるかが問われている。

2 白老高校「三者協議会」の現在

(1)「三者懇談会」から「三者協議会」へ

①白老高校「三者協議会」会則

2003年度に「三者懇談会」の事務局は、会則を作成し、学校づくりにおける位置づけを明確にするという方針を掲げた。実際に、策定に当たっては「長野の辰野高校と、東大附属中高のものを参考」にして草案を作ったということである。そして、2003年度末に職員会議、PTA役員会、生徒総会の承認を経て、2004年3月17日より「三者協議会」会則（「白老東高校のよりよい学校づくりを目指す生徒・保護者・教職員の三者協議会」会則）が施行された（会則は後掲）。ここで白老東高校「三者懇談会」は「三者協議会」と名前を変え、学校づくりにおける位置を明確化することで、さらなる発展を目指した。

しかし、現在の会則の扱いについては、事務局担当教諭に聞き取り調査をしたところ、教員に関しては「渡して見てください程度」、保護者と生徒に関しては配付する機会はないということで、教員に声をかけなければ見ることはできないということであった。また、「ここ3年で3分の2」の教師が異動で入れ替わっているということもあり、会則を作ったときの事を知っている人が少数になると共に、会則自体を知っている人が少なくなっているといえる。現在の生徒会長は会則の施行直後の入学であるが、会則に関しては「見

たことがない」と発言していた。今一度、この会則を配付することや、生徒手帳に記載する等の措置を施して学校関係者に対する三者協議会の位置づけを明確に引き継いでいく体制が求められているのではないだろうか。

もう一つは、制服や携帯電話などの高校生活のルールに関する問題に加えて、授業づくり・教育課程づくりの問題を三者懇談会の話し合いのテーマにしていくということである。

②なぜ三者協議会に移行したのか

上記の通り、会則を定めることに伴って「三者懇談会」から「三者協議会」へと名称が変更された。その過程について飯塚教諭のヒアリング等からいくつか取り上げていきたい。

まず、その理由に挙げられるのが会則の第8条(3)に盛り込まれた事項である。「三者懇談会」では話し合って合意した事柄に関して、その対応はそれぞれに任せられていた。しかし、「三者協議会」になり、第8条(3)に「三者の代表から協議会に提案された協議事項に対して、各機関は話し合いの機会を持ち回答しなければならない」と規定されたことによって、「三者協議会」で取り上げられた事項に関して正式にそれぞれが検討されるようになり、それを報告することになっている。話し合いがその場限りのものにならないことが保障されるようになったということである。つまり、今まで以上にそれぞれの提案を協議会で大切に議論し、「学校づくり」にいかしていこうということである。

次に、「三者協議会」の位置づけとして重要なのが第6条である。「三者懇談会」の設立当初はまさに「懇談会」というものだったが、それが6年経って携帯の持込を許可するルールを作るに至った。そうした成長を踏まえて学校という組織の中で「三者協議会」をどこに位置づけるかというのがこの条文に示されている。すなわち、「協議会は学校運営上の決定権は持たないが」、「合意」事項は学校運営において「最大限に尊重」されるということである。現在の学校制度の中で校長との位置関係などを考えるとこの条文の意味は大きいのではないだろうか。学校教育法では第28条3項に「校長は、校務をつかさどり、所属職員を監督する。」と規定されている。また判例においても、校長に学校の管理運営に関する広範な決定権限を認めており、現行の法制度化では学校の管理運営に関する権利と責任はほとんど校長に帰属するといっても過言ではない。そこで、後述するように、この「三者協議会」を学校運営上どこに位置づけるかということが問題になってくるのである。

他に、「三者懇談会」の発足から中心になってきた教員（飯塚教諭）の異動も、この組織改編の現実的な理由としてあった。「三者協議会」と名前を変え、会則を一年がかりで作上げ、校務分掌の中に事務局担当をどこから出すかということと定め、校内の内規集にも「三者協議会」を入れ、年間行事として年度のはじめに日程を話し合うという形式を整えた。こうすることによって、生徒・保護者・教職員がそれぞれ入れ替わってもこの仕組みが存在し続けていくように、「三者懇談会」から「三者協議会」へと移行したのである。

③小括

最後に、実際に話し合いの場はどう変わったのかということについてふれておきたい。前述の通り、会則を作ったときにも生徒総会と職員会議は通したが、PTA総会を通さず、役員会で承認したという実情がある。それは総会を開いても親が集まらないという事情があり、役員会が承認したということによしということにしようという話になったからであ

る。

「三者懇談会」から「三者協議会」になったとはいえ、話し合いの内容、周囲の関心が変わったということは残念ながらいえない。教頭の聞き取りにはそれを端的に表現した部分がある。「三者協議会も生徒をどう育てるかのひとつ」、生徒たちにとっての「発表する訓練」である、それには「三者協でも三者懇でもどちらでもいい」というのである。上述した会則を知る人が少なくなってきたこととあわせて考えると、「三者懇談会」から「三者協議会」への変更は、今後の発展に可能性を開いたけれども現実的には何も変わっていないと評価できるのではないだろうか。

(2) 第12回「三者協議会」観察記録

①今回の議題

2005年6月17日に開催された第12回「三者協議会」は金曜の17:00~19:20の時間帯で開催された。この会には執行部の生徒13名をはじめ各学年の代表と傍聴希望者を含む9名の生徒、教職員21名(全教員数は24名)、PTA会長ら保護者6名が出席している(これに加え、われわれ12名が傍聴)。司会は生徒会担当の木村和平教諭が執り行ない、生徒と保護者・傍聴者とが、司会と教職員とがそれぞれ向かい合った形で机が配置された中で意見交換がスタートした。

この「三者協議会」で議題となったのは、「カーディガンの着用について」である。現在白老東高校では、冬期間に限ってブレザーの下にのみカーディガン着用が認められている。これについて生徒側から、期間を定めずに着用を認めてほしいという声が上がった。それら意見を生徒会執行部が取りまとめ、「カーディガン着用の自由化」を求めて教師、父母に提案し、今回の「三者協議会」の議題となった。

②準備状況

協議会当日までの事前議論の状況に関して、生徒執行部の会議は毎週火曜に行われているため、協議会までの間そこで議論がなされ、主張の準備をして会に参加しているとのことであった。執行部以外の生徒たちは、なかなか時間が取れず事前のクラス討議が行われていないのが現状である。その代わり、全校生徒は執行部の作成した議題に関するアンケートに記入することになっており、意見のある生徒はそこで述べる形となっている。

教師による職員会議は事前に行われており、今回は「制服を着ることの意義」として、白老東高校の生徒という集団の「看板」としての制服の意義について話し合われたとのことであった。

なお、保護者による事前議論は毎回行われていない。その理由としては、保護者の多忙さ、苫小牧市内居住者が多く白老町まで来校することが困難であること、さらには前述したように三者協議会の開催を知らせるプリントを学校から配布してはいるが、これを生徒が必ずしも親に渡していないため開催を知らない家庭が存在することなどが考えられる(PTA役員の場合は知らせる校報が送られてくるとのこと)。各家庭の保護者は、出欠の有無を用紙に記入して子どもに持たせ学校に提出してもらうので、自分以外の出席者のことや出席の人数を知らない。事前議論の場をもととする働きかけもないため、協議会当日に父母が集まって顔を合わせるというのが現状のようだ。

③協議会の様子

今回の協議会は、生徒会長からの「カーディガン着用の自由化」を求める提案ではじまった。2時間弱にわたる協議会の中で、生徒会副会長や会計役の2年生男子生徒を中心に、3年生の複数の女子生徒や学年代表の生徒たちがカーディガンを着たい理由を主張した。それについて2、3名の保護者や生徒指導部の教員が質問を投げかける場面が見られ、最終的な意見交換の結果、生徒側はカーディガンを着たいという主張に明確な根拠を求める教師や父母側を納得させることは出来ず、次回への持ち越しテーマとなった。

もうすこし協議会の中での議論を詳細に見ていくと、カーディガン着用を求める生徒側の主張は大きく二点に整理された。一点目は、カーディガンはブレザーに比べて体温調節がしやすいということ。二点目は、ブレザーが窮屈になってきており、カーディガンでないと窮屈で授業に集中できないということ。これらが生徒からの主な意見であった。これに対して教師、父母側からは、体温調節の話であれば重要なのはカーディガンではなくて下着であるということ（足元の防寒対策としても、随時ズボンを注文できるようになっている）、白老東高校の「看板」を背負う立場として制服を着てほしいということ、そして一番の意見としてカーディガンを「だらしく着ている」現状があるので認められないという意見が出された。これに対し2年生の男子生徒が、着方がだらしない現在だけを見て判断しないでほしい、改善するチャンスをもらいたいと反論した。自分たちの要求を実現するためにルールを設定しそのルールを全校で守っていく、そのやる気がある時にやらせてもらえないのでは学校は何も変わっては行かないのでは、と主張し、これを受け議論の主題は「集団生活においてルールをつくるとはどういったことなのか」ということに移行する。

しかし、「ルールを作って守ることが出来たらカーディガンの着用を認めてほしいということならば、具体的なルールは考えてきたのか」という父母からの質問に対し、生徒側では具体的な案を考えてきておらず、納得させる提案にまでは至らなかった。加えて、教師や父母から、「カーディガンを着たいと言うが、カーディガンの色やサイズを学校側で統一し、たとえば病院関係や事務の人が着ているような薄手のカーディガンの着用が認められた場合でも着るのか」という声や、「寒さ対策、体温調節のためにカーディガンが必要ということだけれど、下着を一枚多く着たり、女子であればストッキングを履いたり、今の制服のままでも改善の余地はまだ残っている。それらを飛び越えてカーディガンを認めてほしいというのはいかがなものか」という意見が出され、最終的には、ルールの詳細も含めて各面でもう一度話し合ってみるという結論で終了した。「果たして生徒の皆は、今回のテーマに対して本当に本音をぶつけてくれたのだろうか。この会の意義でもある、本音というものを大事に、議論をしに来てもらいたい」という校長の話を総括として、今回の三者協議会は締めくくられた。

(3)第13回「三者協議会」観察記録

①今回の議題

2005年12月17日に開催された第13回「三者協議会」で議題となったのは、「白老東高校を評価する(よりよい学校を目指して)」と「生徒会から(制服について)」の2点である。二つ目の議題は今年の一回目からの持ち越しであり、生徒会が現在もっともがんばっている

テーマである。また、一つ目のほうは教職員側から出された議題であり、この議題を提出するに当たり 10 月末に教職員、生徒、保護者に学校評価のアンケートを実施し、それを集計したものを資料として当日配付した。

尚、今回の「三者協議会」は土曜日の 13:30~16:30 の時間帯で開催され、生徒 25 名（うち、参加希望生徒 6 名）、教職員 23 名（事務長を含む）、保護者 4 名、学校評議員 1 名の他に、傍聴者として砂川高校教員 3 名、函館西高校保護者・教頭・事務長計 8 名、北大から 2 名、総計 13 名が出席して行われた。司会は P T A 副会長の山田和子氏と事務局の木村和平教諭が議題を一つずつ分担して行った。場所や基本的な進行は前回と同じであった。

②前回との変更点

まず、司会に P T A 副会長を加えたことが挙げられる。このことによって木村先生が議論の中で発言しやすくなった。また、副会長の人柄もあり生徒の緊張をほぐす役割を担っていたように感じた。

また、当日配布された「三者協議会」の会次第(レジュメ)の裏に「三者協議会」の会則が載せられるようになった。当日読み上げられることはなかったが、参加者が会則に目を通す機会が確保されたという点では意義があるといえよう。

③協議会の様子

最初に学校評価集計結果に関して教頭から資料の説明が行われた。そして、生徒から教職員側へ要望、教職員側からの回答という形で意見交換がスタートした。興味深かったのは、前半のほとんどの時間を割いて授業について教員と生徒の間で議論が交わされたことである。生徒からは、プリントだけの授業があるとか、クラスごとに進み方が違うとか実際の授業に対する不満に始まり、「どういう授業を理想」としているのか、教える内容をどう決めているのかといったことが疑問として出された。特に、「板書を事前にノートに書いている先生はどれくらいいるのですか」という生徒の問いかけにほとんど全ての先生が挙手して事前に準備しているということを示したところ、生徒から驚きの声があがっていたのが印象的だった。また、教職員からも生徒への要望が出されたり、寝ている生徒を見つけたときに起こしたりしないのか、といった質問がなされ、両者にとって非常に有意義な意見交換の場となったのではないと思われる。

続いて、司会が交替しカーディガンの問題が話し合われた。生徒側は、制服をだらしなく着ている生徒に対して生徒会や風紀専門委員会から声掛けを行っていること、前回からカーディガンを望んでいる生徒が増えているというアンケート結果を基に、制服規定の変更を認めて欲しいという主張が行われた。実際に、この「三者協議会」の前に生徒会の生徒が制服をきちんと着るように他の生徒に呼びかける姿が目撃され、前生徒会副会長(3 年生)も「現在の生徒会はがんばっている」と述べていて、前回の「三者協議会」から半年間、生徒会なりに主張をする前提として制服を正しく着るように呼びかけていたのだということが伺われた。しかし、協議に関しては教職員と生徒の主張は平行線のままであった。

「保護者の意見が少なかった」と、閉会の挨拶の中で生徒会長が述べていたように、授業という保護者には発言しにくいテーマで議論が展開したこともあって全体的に保護者側は発言が少なかった。

④協議会についての評価、感想

今回の三者協議会は学校評価をテーマの一つに上げたところに大きな意義があった。議論の中身としては、生徒と教員の二者による授業に関しての意見交換、といった側面が大きかったが非常に率直に両者が意見を述べながらも、生徒が特定の教師に対する非難にならないように配慮しながら主張している姿には好感が得られた。ただ、休憩中の廊下での生徒の会話からは、教師の反論に対して納得しきれない部分もありながら、言い返せないもどかしさを抱えているような印象を受けた。

一方で、課題として挙げられるのは保護者の位置付けの問題である。今回のように学校評価、とりわけ授業評価が議題に扱われると普段授業を見ていない保護者には容易に議論に参加し得ない状況も生まれうる。こうしたときにどういう立場でどういった発言をしていくのか、保護者として教員にどのような授業を求めるか、生徒にどういった発言をするかということは、事前の協議無しにはなかなかできない難しさがあるように思われる。また、保護者の数は前回より1名少なくなっていて、保護者の関心を高めることが依然として課題である。

(4) 教頭・教員の「三者協議会」評価

①教頭ヒアリングから

i) 「三者協議会」の意義

教頭は、白老東高校の子どもの中には受験学力において低位とされて自信を喪失している子どもも多く、そのような子どもが自信をつける一つの機会として「三者協議会」をとらえている。「三者協議会」を実施するに当たって、教員が資料提供などで支援しながら生徒たちの主体性を引き出すこと、生徒指導部教員が「壁」となって生徒に課題を気づかせようとしながら生徒会担当教員が応援団的な役割を担うことで生徒を励ますこと、議題の設定においても日常の学校生活の中から子どもが発言しやすいものを選ぶこと、などを重視している。

ii) 「三者協議会」の評価

教頭は「三者協議会」の状況を以下のように評価している。

まず教員に関しては、「三者協議会」に取り組む姿勢が二つに分かれるという。「三者協議会」を、生徒を伸ばす機会と見て積極的に取り組む教員がいる一方で、協議会に参加しない消極的な教員の存在がいることを認めている。教頭は異動してきた教員に対して「三者協議会」という取り組みの性格と機能を理解してもらうことに加え、とにかくまず「三者協議会」に参加してもらうことを望んでいる。教員間で「三者協議会」の意義を共有し、教職員集団が力を合わせてそれをうまく機能させることを期待している。

保護者に関しては、参加している保護者からは好印象であり、継続を願う声があるという。しかし、ここ2年間で「三者協議会」のために来校したのはそれぞれ10名程度であり、保護者にもっと関心をもってもらいたいと述べる。白老東高校のPTA活動でも会合を開いて集まるのは6割程度で、公開授業をしてもほとんど来ない、土日に三者協議会を開いても来ない保護者は来ないし、来る保護者はどの時間に設定しても来るといふ。「三者協議会」へ参加する保護者の増加が期待されている。

生徒については、議論の中で要求がはねつけられているので子どもたちから徒労感がみ

られるものの、三者の間には「三者協議会」を通じて「何かいいものができるという意識」が共有されてきており、生徒の側からもこの中で何かを勝ち取ろうとしていることが伺えるという。

②教員アンケートから

2005年6月17日の「三者協議会」の終了後に9人の教員に対して聞き取りによるアンケートを実施した。その概要を整理する。

i) 「三者協議会」の意義

参加している教員が答えていることもあり、ほとんどの教員が「三者協議会」を有意義としている。その理由として、生徒たちの発言の場を設けることで不満がたまらないこと、生徒や親たちの考えが聞けることなどを挙げ、「三者協議会」の継続を願っている。継続していくことや積み重ねの重要性を指摘する教員もいる。ただ、参加しつつも肯定的な評価を保留している教員も見受けられる。「そこまで荒れている学校でもない」、「生徒の声を聞きすぎるから、だんだんとけじめがなくなる」というように、協議会に対して距離を置く教員も一部にいる。

ii) 「三者協議会」に取り組む生徒の状況

事前のクラス討議の様子について、積極的にクラスで討議されていると認識している教員は皆無であった。話し合いをしたとしても意見を出し合うような積極的なクラスは少ないようである。その背景として、7月に学校祭を控えていたことや、授業時数の確保で「三者協議会」の時間の確保が難しかったことを指摘している。

「三者協議会」への生徒の関心については、全校生徒が参加していると認識している教員はいなかった。主に生徒会執行部の生徒が中心となってアンケート調査を行ったりして、議題が周知されている程度だとする教員もいた。

また、「三者協議会」での生徒の発言に対しては積極的に見ている教員が多い。また、生徒に関心のあるテーマであれば単なる要望ではなく理論立てて主張できるだろうと見ている教員もいる。ただ、参加している生徒の発言者に偏りが見られることや、討論にはなっていないという指摘もあった。

iii) 「三者協議会」を通じた変化

生徒への理解に関しては、「三者協議会」の取り組みがなくても日常的に意識しているとする教員が多く、議論をしながら指導することを心がけていると述べる教員もいる。また、ある異動してきた教員は、白老東高校の教員の雰囲気としてコミュニケーションをとろうとする雰囲気があると感じている。

ただ、生徒理解が深まっているかどうかに関しては、「三者協議会」を通じて深まったと積極的に捉えている教員がいる一方で、「三者協議会」での生徒の主張はあくまで一部の生徒の主張ということに留意する必要がある、と述べている教員もいる。参加した教員の中では生徒の声を聞く意識が高いことは共通しているが、生徒理解の深まりという点では、積極的に捉える教員と慎重に捉えている教員に分かれている。

日常生活での生徒の変容については、生徒が主張する場を設けることで教員に対する不信感が薄まり、信頼関係の構築に役立つとする教員や、議論の中で子どもが自分の考えを自分の言葉で主張できるようになってきたなど、生徒の成長を感じる教員もいる。ただ、このような子どもたちの変容も参加している生徒に限られ、それ以外の生徒に対しては殆

ど波及的な効果は教員たちの間で認識されていなかった。

iv) 「三者協議会」の課題

今後の課題として、生徒への関わりに関しては、子どもの外的外れのような発言をいかに理解しフォローしていくかということに関して、言葉の選び方やアプローチ方法を考えていくことや、協議会の中での生徒たちの役割分担や生徒総会の活用といった生徒たちの組織的課題、参加している生徒がそれ以外の生徒にも影響を与えて生徒全体の向上につなげていくこと、といった課題が挙げられる。このように生徒への関わり方を改善するとともに生徒の意欲を摘み取らないように、教員の意識の変革も重要としている意見もあり、参加者が固定化していることから、マンネリの克服のために全体的に参加者を増やすことや、生徒の声を聞くこと、生徒が話すことの大切さを教員がもっと意識すること、といった教員側に対する課題も提示されていた。

③事務局担当教員へのヒアリングから

現在の「三者協議会」事務局担当の木村教諭、落合教諭の両氏にヒアリングを行った。

i) 「三者協議会」事務局の役割

事務局は、異動してくる教員に対して「三者協議会」の説明をしている。しかし、教員間での「三者協議会」に対する理解には差異が拡大しており、参加を無理に求めることはしないという。今年の6月の「三者協議会」に臨むに当たって、教職員間では「研修」で事前に話し合う場を設定したが、その内容も現状認識、意見交換を図るもので、教職員全体としての一致した見解を用意するものではなかった。「三者協議会」について「研修」を行ったのも事前にテーマを把握していたという状況があったからであって、毎回行っているわけではない。

また、事前準備としては、生徒一人ひとりの考えを把握しておくように努め、実際の協議会の場でも生徒が発言しやすいように議論のバランスをとるような配慮をするように心がけている。

ii) 「三者協議会」の課題

事務局担当教員が捉える三者協議会の課題は、大まかに以下の三点のとおりである。

【テーマの設定プロセスと内容】

話し合われるテーマは、生徒、保護者からのテーマを募集し、教員側でも検討される。しかし、今回は保護者からは結局出ず、教員側でも、現在の携帯電話の持込についての再考と習熟度別授業について検討されたが、前者は現在目立ったトラブルが起きていないこと、後者については教員間での議論が熟していないことがあり、生徒側からのテーマのみになった。生徒が提示するテーマに興味を持たずに参加しなかった教員もいるということである。教員側からのテーマの提示が無いことは課題であるとの認識が事務局担当教員から示された。

過去にテーマが携帯電話の時には、授業も関連して、「何のために勉強するのか」という本質的な問いに深化し、それに教員たちが応答するなど、三者の間で深い議論に発展したという。テーマ設定には三者協議会に参加する動機との関わりがあることから、三者の間で問題意識を共有できるようなテーマの設定が課題となっている。

【参加者の拡大】

参加者に関しては、教員、生徒、保護者の三者の立場においてさらなる増加が期待され

ているが、保護者の参加者が少なさは深刻に受け止められている。現在は PTA 役員を通じた直接の呼びかけのみに頼っているが、三者協議会の取り組みを周知させることが保護者の参加拡大に向けた当面の課題とされる。

様々な人びとの参加が増えることで関心の薄い教員への刺激になるだけでなく、その議論の中で発言することは子どもの自信になるという認識がなされている一方で、三者以外の参加については、白老東高校の三者協議会でも地域住民や OB、OG の参加に門戸を開いているが、参加はほとんど無い。町民にも地元の高校という意識が感じられないという。

【生徒の発言力の向上】

「三者協議会」で生徒たちは様々な大人たちの発言に対して十分に自分たちの意思を伝えることができるかどうかという課題を常に抱えている。特に木村教諭は国語科担当ということもあり、子どもの言語表現の力の乏しさを気にかけている。うまく自分の考えを表現できずに不満をためてしまうことが無くなるよう、言葉で表現する力をつけていきたいと木村教諭は今後の抱負を述べている。

④小括

以上のように、今回の教頭・教員へのヒアリングとアンケートから、教員の間には評価の差異があり、参加者が広がっていないという課題がありつつも、子どもの成長の場として「三者協議会」をとらえ、子どもの声に耳を傾けることを重視していることがわかった。

ヒアリングによれば、「三者協議会」に参加して発言している生徒も日常生活では決して「優等生」ではないが、教員たちはその上で生徒の抱える課題に教師としてどのように対応するかを考えつつ、生徒たちの発言を受け止めようとしている。こうした教員たちの姿勢が、生徒たちの意見表明とかみ合い、白老東高校「三者協議会」が子どもの意見表明権を保障する実践としてさらに発展していくことが期待される。

ここで、「三者協議会」と日常の教科教育との関わりについて注目してみたい。上記の木村教諭の生徒の言葉に対する問題意識は、「三者協議会」での子どもたちの課題を国語科教育の中で応答していこうとする姿勢の表れである。ヒアリングでは過去に日々の授業の意義を問うような議論が起きたとも聞かれたが、これは学校で学ぶ意義を子どもを含めた三者での議論によって再構成し、さらには教育内容の改善へとつながる可能性を秘めていることを示している。学習の根源的な内発的動機づけという教育方法的な意義があるということだけでなく、教育内容を共同的に改善する関係の中で子どもが市民として成長していく契機を含む取り組みとして発展していくことが期待できる。

以上のように意義づけられる「三者協議会」であるが、参加した教員と不参加の教員との間で認識の差異があることが大きな課題となっている。これは教職員集団づくりの課題でもある。教員一人ひとりの認識や力点の多様性を認め合いながら共同的に子どもに関わるためには、教員間での信頼関係が構築されていることを必要としている。教員たちがいかなる同僚性を築くかが問われているといえよう。

これは教員間のみならず、「三者協議会」全体の課題として捉えられるべきである。「三者協議会」は三者が互いに率直な意見をぶつけ合う場である。生徒が成長する場としてだけでなく、三者が互いに信頼し合う共同的な関係構築を指針として共有しながら、一人ひとりが自由に主張し、それぞれの多様性を認め合う場として発展していくことが期待される。

(5) 保護者・生徒の「三者協議会」評価

①保護者による評価

2005年6月の「三者協議会」終了後に、PTA役員2名・一般保護者1名に対して、白老東高校「三者協議会」についてどのような受け止め方をしているかについて、聞き取り・アンケートを行った。サンプル数は少ないが、その結果をもとに、保護者が「三者協議会」をどう見ているかについて考察を加える。

i) 保護者への認知度

「三者協議会」そのものの認知度について、保護者は学校からの学級通信等で「三者協議会」のを知ることができるが、それらは生徒を通じて配布されるために「保護者の手に渡っているかどうか」も疑問であり、「文書は出ているが読まない」と思っている保護者もいる。「三者協議会」の存在は「何かしらの伝達物で知」ることはできるものの、それがどれほど保護者の間に知られているかは、生徒が「学級通信を親に見せるかにかかっている」というのが保護者に共通する認識である。保護者の「三者協議会」への関心については、今回初参加のPTA役員が、「(PTA役員には)手紙も送られてくる」こともあり、「PTAの研修や講演会など集まりがあって、その中で「三者協議会」の話も出てくる。(保護者の)関心はあると思う」としている他は、「参加者は(関心が)深まる」が、「一般の親・生徒は(深まるとは)思えない」という意見であった。

ii) 「三者協議会」の議論

保護者の意見・要求が「三者協議会」の議論の中で受け入れられているかどうかについては、「学校側としては最大限の努力をしている」と感じていたり、「意見・要求はあまりないけど、出てきたら受け止めてくれると思う。話しやすい関係だと思う」と言うように、保護者は学校に理解されていると思っている点で認識は一致している。

生徒たちの主張について保護者は、「発言も多く出て、女の子たちも遠慮がないように見えた」、「(きちんと提案されていると)思います。生徒たちの要求は熱い」、「それなりに理論立てを考えている」とみなが評価しているが、「反論の準備がない」との意見もある。

iii) 保護者から見た生徒の変化と「三者協議会」の意義

「三者協議会」を通じての生徒の日常的な行動や姿勢については、「三者協議会の結果かどうかは微妙だが」、「(髪型、がんぐるなど)一時期よりはずっと良くなった」としており、また、「誰かが動く、それによってみんなが動き」、「ルールをみんなで守ろうとする」ようになったと、保護者は「三者協議会」の影響を認めている。

「三者協議会」の意義に関しては、「聞ける場としても言える場としてもすごくいい」、「子供と話す機会がないので、今の子どもたちの見方がすごく変わった」と話している。保護者は三人とも、「三者協議会」は今後も継続してほしいと評価している。その上で、「事前と事後の話し合いがちゃんとなっていない」、「親の人数が子どもと同じくらいになるといい」、というような今後の課題のとらえ方をしている。

②生徒からみた「三者協議会」

生徒へのアンケートも2005年6月の協議会に参加した生徒のうち18名から記述回答を得たものであり、聞き取りは9月に生徒会役員7名に対して行なったものである。

i) 生徒の参加・関心

生徒会役員の中では、「事前のクラス討議にはみんな積極的に参加しているか」という問

いにはっきり「はい」と答えた生徒は 18 名中 6 名で、「積極的に取り組んでいる人と、いない人がすごくわかれ」る、「半分くらい」という意見を含めると、「あまり（討議に）参加していない」とする生徒が大勢であった。なかには、「男子はカーディガンを着ないので興味がなさそうだ」、「クラス討議を行っていない」などがある。一方で、「三者協議会に生徒は関心を持っているか」との問いに対しては意見が分かれた。「関心を持っている・持っていないと思う」とこたえたのはそれぞれ 7 名と 8 名で、その他は、「半分くらい」、「（生徒会に）頑張ってもらいたいというくらい」、「要望・文句を言うけど、三者協には参加してくれない」という意見であった。

ii) 「三者協議会」の議論

生徒の意見が教師や学校に理解されていると思うかどうかについても意見が分かれた。「生徒の意見が学校や父母に受け入れられている」と思っている生徒は半数で、その理由は、「ケタイは実現された」、「言いたいこと言えた」というものである。一方で、生徒の意見が「伝わっていない」と感じている生徒のうち約半分は、「ケタイは実現された」が、「ケタイ以外は」「あまり理解されている気がしない」というもので、その他には、「自分たちの思っていることと先生方が思っている差が違いすぎていた」、「その後の先生方の話し合いの内容」が分からない、「先生はこの問題をくだらないと思っているようにしか見えない」などの理由が挙げられている。

「三者協議会」を通してもっと学校を変えてほしいという意見を 18 名中 12 名が答えており、修学旅行などの行事や、カーディガン・ジャージなどの制服の問題が挙げられている。

iii) 「三者協議会」を通じての変化と意義

「三者協議会」がきっかけで親と学校のことについて話すことがあるという生徒は「時々」を含めると、18 名中 7 名であり、その他の生徒は「ない」と答えている。「話す」と答えたなかには、親が興味を持っていると言う生徒もあった。

初めて参加した生徒など、「分からない」と答えた生徒を除いては、全員が「三者協議会は有意義だと思う」と答えており、「すごい貴重な時間だと思う」としている。「三者協議会」は今後も続けて欲しいとほぼ全員が思っている。しかし、前期生徒会長は「三者協議会」について「話し合いで決まらないうと、意味がない」と言っている。

iv) 「三者協議会」の課題と生徒会執行部の引継ぎ

今後の課題としては、「もっとみんなが参加した方がいい」といった参加者の増加や、「時間がみじかい」「もっと長く」とあるように会議時間の延長、また、「生徒会がもっといいコトをまとめてから協議会にのぞんだ方がいい」というように、テーマの決め方・意見のまとめ方の改善が挙げられている。テーマに関しては、「アンケートをとって、取り上げてほしいことを聞く」など「生徒会の中で話し合っ」て決めているということである。しかし、「生徒会の中で決めたテーマ以外に、先生側からも一つテーマが示され、(中略)、戸惑うこともあった」とも前期生徒会長は言っている。

生徒会の代替わりに際しての協議内容の引継ぎは、「生徒会のほとんどは 1 年生でやっていた生徒が 2 年生でも生徒会をやるといような持ち上がりの状態」なので「三者協議会」の「準備をするときに経験者が経過を教えながら話し合うという形で伝わることは伝わる」と、現生徒会役員は言っている。2 年生の生徒会役員は、「今回は、重点項目とし

て後期も引き続き検討課題にしてほしいということで引継ぎされ、「資料などのファイルを受け取ったが、活動についてじっくり話してはいない」と述べており、現生徒会長も「旧メンバーから新メンバーへという形のものはない」と言っている。

③保護者・生徒の「三者協議会」の受け止め

「三者協議会」に参加している保護者からすると、「三者協議会」は普段話す機会のあまりない子どもと話せる機会であり、生徒・保護者ともに成長でき学校への関心も高まる場であって、大いに評価していることがわかる。しかしながらその意義も、参加者以外には共有されていない。少なくとも参加している保護者はそう思っている。多くの保護者に理解・認識されているとしても反応がないために知るべくもないのが現状であり、そこからの声をつかめるか否かが重要な課題である。協議会の前後に話し合いがされておらず、「持ち帰って話す場がないのでもやもやする」という声はその課題を如実に表している。PTA 役員は、PTA 役員の中には関心があると見ているのに対し、一般の参加者は「PTA の関心は低い」と見ていることも考慮される点であろう。保護者は、学校に保護者自身の意見を理解してもらえる点、生徒と話をできその成長を見られる点で「三者協議会」を評価しており、保護者の協議会への参加拡大もしくは周知、協議会前後での保護者間における話し合いの機会の設定、生徒の協議会への論戦準備などをその課題としている。

生徒も、生徒会役員だからということもあるが、さまざまな学校の問題の解決、要求の実現の場として「三者協議会」に大きな期待を寄せている。であるからこそ、携帯電話の使用を許可されたことを自分たちが「理解されている」理由にする一方でそのほかの問題が解決されないことを不満に思っていることに見られるように、生徒の要求の実現具合が、学校や保護者に自分たちの意見が受け止めてもらえていると思うかどうかのバロメーターとなっている。「三者協議会」を通しても目に見える変化がなかったときには自分たちは理解されていないと思うのであり、話し合いで何も決まらないために「三者協議会」の意義が見えづらいのである。それは、生徒は「三者協議会」の結果には関心を持っているがその過程の議論には積極的でないという傾向が示すように、生徒全般にもあてはまることと言えるだろう。「協議会の終盤になると職員会議で決めるというのに落ち着くのが不満」だという生徒の声からは、生徒と教員との間に「三者協議会」に対する認識のズレのあることがわかる。言いたいことは言えても、その後の教員側の話し合いの結果も知らされず、実際何の変化や改善も見られなければ生徒は疑問を抱かざるを得ない。協議会の時間を長くしてほしいという要望は、行事など時期的な兼ねあいでも時間が取れずに生徒の間での事前の議論が不十分なこともあって、時間内で十分に生徒側の意見を伝えられていないと感じていることの裏返しである。ともあれ、要求はあるが協議会では何も変わらず、意見がうまく伝わっていないと感じるために、もっと生徒の意見をまとめる必要があると感じているようである。生徒の参加についての受け止め方がそれぞれ分かれるのは、関心があり積極的に取り組む生徒とそうでない生徒が別れているために、見る層によって生徒をどう捉えるかが異なってくるからであると思われる。

生徒、主に生徒会の役員は、教員や保護者と話し合えること自体を貴重な機会としてとらえつつ、実際に話し合いで何かが決まり変化することにその意義を感じ、今後も続くことを望むなど、「三者協議会」を評価している。そして、生徒・先生を含めた参加者の広がり、協議後の職員会議での話し合いの経過報告、協議会の時間延長などを求め、協議会へ

向けての生徒会での議論の積み重ねを今後の課題としてとらえている。協議会での議論が進展するために、生徒会の引継ぎ体制を強化することも必要であると思う。

3 まとめ

(1) 三者協議会は何をもたらしたのか

「三者協議会」は白老東高校にもたらしたといえるだろう。

第一に、生徒と教員の関係の変化である。協議経過のところでも触れたように、飯塚教諭の白老東高校に赴任した後の第一印象は「生徒が言いたい事を言えていないな」というものであった。それが、教員アンケートとヒアリングからのところでも触れたように、「教員の雰囲気としてコミュニケーションをとろうとする雰囲気がある」と、新たに異動してきた教員が感じるように変化してきている。これは、三者協議会があることによって生徒と教員が意見を主張し合える場があるので、お互いを理解しようという意識が他の高校よりも高いのではないかと推察される。そうすることによって、生徒と教員間の信頼関係構築に好影響を及ぼしているようである。

第二に、生徒の主体性である。飯塚教諭は、「三者懇談会」・「三者協議会」の実施と並行して学校行事が飛躍的に変わったとして、こう語っている。「自分たちの意見をきちっと聞いてもらえる場がある」ということで、「自分たちで力を合わせて何かを表現するということへのこだわりが出てきている」。また、教頭も学校祭はすごく盛り上がっているとした上で、「そのエネルギーはどこにいても引けをとらないだろうという学校づくり」をしていると述べている。このように、「三者協議会」という場があることによって、生徒には自分の考えを表現したい、意見を表明したいという主体性が生まれてきているといえることができる。

(2) 白老東高校「三者協議会」の課題

白老東高校「三者協議会」の現状を踏まえてこれからの課題について考えてみたい。

まず、現在の状況であるが、規約の第1条と第6条に規定されているように「合意」できる協議機関である。そして、「三者懇談会から三者協議会へ」という項でも触れたが、「三者懇談会」で「ルール」を作るところまで成長し、より発展するために「三者協議会」へと改称した。しかし、「三者懇談会」を中心になって引っ張ってきた教諭が、「三者協議会」を一度も開催することなしに白老東高校を離れてしまい、「三者懇談会」と違う「三者協議会」というものについてのイメージが共有されることなく規約だけが存在するという形になった。そして、教員集団は「生徒の成長の場」としての側面を重視し、生徒からしてみると「先生はこの問題をくだらないと思っているようにしか見えない」という意見が述べられるような、ともすれば本気で議論しようという姿勢を失っているのではないかという状況が見受けられた。一方で、保護者も「聞ける場としても言える場としてもすごくいい」と評価するのみで、合意形成を行ない、積極的に学校参加を行なおうという姿勢は十分には見られない。また、生徒もさまざまな学校の問題の解決、要求の実現の場として「三者協議会」を捉えている。「三者協議会」で主張することによって何とかしてもらおうという意識が見え隠れしており、課題を自分たちのものとして引き受けようという地点にまでは到達し得ていない。現在の「開かれた学校づくり」を目指した「学校

運営協議会制度」や「学校評議員制度」などの一連の施策のなかで、この「三者協議会」を学校参加、住民自治の場として位置づけていこうとするならば、このような現状はその理想とはまだ一定の距離があるといえる。

学校は生徒の発達を保障する場である。子どもの「最善の利益」を保障するには、その発達段階に応じて、大人が子どもを理解し、その成長を促すようにしていくことが重要であるが、こういう観点からこの取り組みを検討してみたい。

白老東高校の生徒たちは就職する割合が大きい。つまり、卒業したら大人として社会の中で扱われる生徒が多いのである。先の発達段階で言えば、子どもから大人への移行期の段階として捉える必要があるといえる。「三者協議会」は、周囲の大人たちが移行期にある生徒のことを理解し、発達を促すためのまたとない機会である。生徒の考えを理解したうえで発達段階に応じて尊重していくことが、生徒の発達を保障する場としての学校に求められているとするならば、移行期にある生徒の考えを理解し、汲み取れる限りで尊重し、移行期にある生徒たちの発達に固有の課題を見出して教育実践に結びつけていくことがこの「三者協議会」という機関に求められていることだといえる。そうした意識がより明確にされる必要があろう。

実践的な課題として、参加者の拡大という課題がある。これはそれぞれの立場から役職についているものが参加することによって参加者が固定化してきているという現状の裏返しでもある。それぞれの立場での自主的な参加者を増やしていくことが重要である。それぞれの立場の役職についている人が参加することによって一応代表性は担保されているが、自発性のある自由参加者の存在が議論を活発にする役割を果たせるのではないかと期待される。

それとともに、裾野の拡大ということも考えられる。すなわち、「三者」から「四者」へということである。地域住民や卒業生に広く門戸を広げることにより、参加者を拡大することが可能である。地域住民や卒業生というのは代表性を付与することや事前に討議をする場所、組織という点で問題があり、日常的に学校とかかわりを持っていないという場合も想定されるため、そのかかわり方は検討の余地があるが、これらの人々は生徒や保護者が年々代替わりすることや、数年で教職員が異動をすることと比べて継続的に協議会にかかわり続けられるという利点がある。伝統を次の世代に伝えるというときに彼らが果たせる役割は大きいだろう。

高校三者協議会実践の意義と可能性

<表> 白老東高校三者懇談会・三者協議会の協議経過

		司 会	場 所	テ ー マ	参 加 者
第 1 期	第 1 回 1998.12	教頭	校長室	特になし	P T A 三役 4 名 生徒会役員 5 名 校長、教頭、教員 6 名
	第 2 回 1999.12	教頭	会議室	特になし	P T A 三役 13 名 生徒会役員 11 名 校長、教頭、教員 7 名
第 2 期	第 3 回 2000.06	生徒会役員 2 名	会議室	①部活動の活性化について ②制服について	P T A 役員 8 名 生徒会役員 9 名 校長、教頭、教員 8 名
	第 4 回 2000.12	生徒会役員 2 名	会議室	①制服規定の一部見直し ②親・先生から見て子ども・生徒は本当にだらしのないのか？	P T A 役員 4 名 生徒会役員 11 名 校長、教頭、教員 9 名
	第 5 回 2001.6	生徒会役員 2 名	会議室	①理想とする生徒とは、どのようなものか？ ②生徒に対する不満は何か？	P T A 役員 11 名 生徒会役員 11 名 校長、教頭、教員 10 名
第 3 期	第 6 回 2001.12	教員（三者懇事務局）3 名	会議室	①制服について ②携帯電話について	P T A 役員 4 名 生徒会役員 10 名 校長、教頭、教員 8 名 傍聴：大学教員 1 名、高校教員 2 名
	第 7 回 2002.6	教員（三者懇事務局）3 名	会議室	学校生活におけるルール作り ①制服について ②携帯電話について	P T A 役員 11 名、その他 1 名 ※学校評議員 3 名 生徒会役員 10 名、各学年代表など 10 名 校長、教頭、学年・分掌代表 4 名、その他 3 名 傍聴：高校教員 1 名

	第 8 回 2002.12	教員（三者懇事務局）3 名	社会科 教室	①携帯電話について ②授業について	P T A 役員 8 名 ※学校評議員 2 名 生徒会役員 12 名、各学年代表など 12 名 校長、教頭、学年・分掌代表 6 名、その他 4 名 傍聴：大学教員 2 名、高校教員 1 名、美瑛高校（教員 1 名、生徒 11 名）
第 4 期	第 9 回 2003.6	教員（三者懇事務局）3 名	社会科 教室	①携帯電話について ②授業について	P T A 役員 7 名、その他 1 名 ※学校評議員 5 名 生徒会役員 12 名、各学年代表など 8 名 校長、教頭、学年・分掌代表 7 名、その他 2 名 傍聴：富良野高校、登別高校
	第 10 回 2003.12	教員（三者懇事務局）3 名	社会科 教室	①授業について ②制服について	P T A 役員 8 名、その他 1 名 ※学校評議員 2 名 生徒会役員 12 名、各学年代表など 6 名 校長、教頭、学年・分掌代表 7 名、その他 8 名 傍聴：佐呂間高校

以下、三者協議会

	第 11 回 2004.12	教員（三者協事務局）3 名	社会科 教室	①制服について（生徒からの提案） ②どういう大人を目指すか（保護者からの提案）	P T A 役員 7 名 ※学校評議員 2 名 生徒会役員 12 名、各学年代表など 7 名 校長、教頭、学年・分掌代表 7 名、その他 8 名 傍聴：高校教員 3 名、大学生 1 名
--	-------------------	---------------	-----------	--	--

※2004 年度は 6 月には開催されなかった。また、第 11 回の参加者人数は「実施要項」より抜粋したため、実際の参加者数とは限らない。

<資料> 白老東高校「三者協議会」会則

『白老東高校のより良い学校づくりをめざす生徒・保護者・教職員の三者協議会』

第1条 【目的】

日本国憲法・教育基本法・子どもの権利条約の精神に基づき、より良い学校づくりのために、生徒・保護者・教職員が定期的に話し合う機関として三者による協議会を設置する。

第2条 【名称】

この協議会の名称を「白老東高校のより良い学校づくりをめざす生徒・保護者・教職員の三者協議会」(略称：白老東高校三者協議会)とする。以下、協議会と呼ぶ。

第3条 【事務局】

協議会の補助機関として、事務局を設ける。事務局は3名の教職員(総務部・生徒指導部・生徒会顧問の代表各1名)で構成され、協議会の日程および内容について三者の調整を行う。

第4条 【組織】

協議会は、生徒・保護者・教職員の代表によって構成する。

- (1)生徒の代表 生徒会執行委員(生徒会執行部、専門委員長)
各学年代表2名ずつ
- (2)保護者の代表 PTA会長、副会長
研修・広報・生活の各委員会代表1名
- (3)教職員の代表 学校長、教頭、事務長、各学年の主任、各分掌の部長
- (4)事務局

第5条 【公開の原則】

協議会は原則として公開とする。代表以外の生徒・保護者・教職員にも参加する権利があり、必要に応じて、同窓会員・学校評議員・地域住民・教育関係者の参加を求めることができる。

第6条 【協議会の権限】

協議会は学校運営上の決定権は持たないが、協議会で合意された事項は、より良い学校づくりのために最大限に尊重されなければならない。

第7条 【定例の協議会】

定例の協議会は、原則として6月、12月に開催する。ただし、三者の代表から要請があれば臨時に開催することができる。協議会は事務局が召集し、運営する。

第8条 【協議事項】

- (1) 協議会はより良い学校づくりのために、以下の事項について議論する。
 - ① 学校生活や規則に関すること
 - ② 学習や進路に関すること
 - ③ 生徒会活動、部活動、HR活動や行事に関すること
 - ④ 教育環境に関すること
 - ⑤ その他、より良い学校づくりに関すること
- (2) 三者の代表は、各機関(生徒会・PTA・職員会議)で合意された事項を協議事項として協議会に提案することができる。
- (3) 三者の代表から協議会に提案された協議事項に対して、各機関は話し合いの機会を持ち回答しなければならない。

第9条 【改正手続き】

会則の改正には三者の合意を必要とする。

付則 この会則は、2004年3月17日より施行される。

第二部 美瑛高校三者協議会の事例研究

1 美瑛高校「三者懇談会」の設置と協議経過

(1) 町と高校の概要

①美瑛町の概要

北海道のほぼ中央にある美瑛町は約 67700 m² という東京 23 区に匹敵する面積を有している。主な産業は開拓時代から続く農業であり、最近では農村景観「丘の街美瑛」として有名になり、観光の街でもある。最も近い都市部である旭川市へは電車で 30 分程度の位置にある。

人口は最も多い昭和 30 年代で 2 万 1 千人程度だったが、現在では離農も進み 1 万 1 千 8 百人程度で、少子化もすすんでいる。昭和 30 年代には小中学校合わせて 33 校であったのが、統廃合が進み、平成 18 年度末には小学校 6 校、中学校 3 校の計 9 校になる予定である。

②美瑛高校の概要

北海道美瑛高等学校は、北海道永山農業高等学校（現北海道旭川農業高校）の分校として認可され、定時制農業科が開設（1948 年）された。1951 年に被服科の開設、1956 年には、定時制普通科が開設され、定時制農業科は昼間季節制に変更、また定時制の生活科・家政科の設置等もされたが、普通科以外の学科はそれぞれ募集停止となり、1982 年には全日制普通科のみの募集となった。

2005 年度的美瑛高校には、1 年生 38 名、2 年生 44 名、3 年生 53 名の計 135 名の生徒が在籍している。生徒の出身地は 50% が旭川市、44% が美瑛町、残りがその他である。2005 年度の入学生徒数が 40 人を切ったが 31 人以上であれば 2 学級編制を維持するという「特例 2 学級制度」の適用校となっている。翌年には 41 人以上の生徒が集まらないと 2 学級回復はならず、学校は統廃合の対象とされることとなる。

勤務している教職員は、学校規模からすると新卒教員を含めて構成されるケースが多いのだが、教員の平均勤続年数は 16 年と比較的高くなっている。これは、旭川市に自宅をもつ教員が通勤できる距離に学校があるためである。

美瑛高校では、町で行っている清掃活動などのボランティアに積極的に参加するよう呼びかけている。地域に花のプランターを置いて、地域の人と協力して世話をしているほか、2005 年度は「ヘルシーマラソン」への全員参加など積極的に活動している。また、職業見学、職場実習、など職業意識を考えさせる進路指導を行っている。2004 年度卒業の生徒の進路は、短大 1 名、専門学校 22 名、就職 11 名、進学・就職のいずれもしていないのが 11 名である。就職先はほとんどが上川管内で、道外へ出るものはいない。

(2) 設置の経緯

①設置のきっかけ——学校祭の取り組み

美瑛高校は、周囲から教育困難校と呼ばれることもあり、教師がその対処に忙殺されることもしばしばであったが、それでも美瑛高校の教職員は、生徒や父母と話し合いながら状況打開につとめていた。しかし、2000 年度の学校祭では、夜の行灯や花火のときに外部の人間が乱入し、混乱をまねく事態が生じた。そこで、2001 年度には行灯を昼の仮装

行列にし、花火は中止とされ、さらに**2002**年度には、これまでの休日開催から平日開催に変更されることとなった。

生徒たちは不満だったが、学校の現状を考えると受け入れざるを得ず、生徒会執行部もなかばあきらめてしまっていた。新しく生徒会顧問となった波岡知朗教諭が「本当にそれでいいのか？」と呼びかけてみたところ、自分たちのやりたい学校祭にしたいけれども、職員会議の決定事項であり、予定表にも組み込まれており、どうしようもないという反応が返ってきた。実際に職員会議でも、既に決定されたことを覆すことはできないというのが多数意見であった。

そうしたときに、学校祭でPTAがバザーを催すため、打ち合わせの機会があった。波岡教諭は、その打ち合わせに執行部の生徒たちを連れて行き、生徒から学校祭を平日に開催したい旨をPTAに訴えるチャンスをつくった。初めは昨年度の学校祭が荒れていたことを非難する声が多かったが、最終的に「あんたたちがやりたいんだったらやればいいしょ」と、日程を変えるように励まされた。これで生徒会役員たちもやる気になり、学校祭原案を作成して職員会議に向けて提出をする。職員会議では反対意見も出たが、最終的には日程変更と行灯、花火の復活が認められることとなった。学校祭の一般公開日には約**300**人の見物客が訪れ、行灯の観客も増えたほか、当日の運営にPTAからの協力も得られるなどの成果も得られ、無事に学校祭は終了した。

②生徒要求実現のための保護者・地域の学校参加

学校祭も成功をおさめ、さらに本格的に生徒の声を集めるためのアンケートを実施し、出された多様な意見を生徒会が「ここを変えたい**7**項目」にまとめた。その**7**項目とは、「登校時間の変更」「自動販売機の設置」「生徒が常識を見直すこと」「売店でのパン以外の食べ物の販売」「昼休み・放課後の体育館開放」「先生が生徒の意見を尊重し、生徒を平等に見ること」「顧問も生徒もまじめに部活動にとりくんでほしい」というものである。

このうち、とくに強く不満とされたのは登校時間についてであった。美瑛高校では**2001**年度途中に朝のHR開始時間を**8時40分**から**8時35分**にする提案がされ、職員会議で決定された。朝の登校時間を変更することで生徒を早く学校へ来させることが理由だった。通学に利用される列車の美瑛駅到着時刻が**8時12分**のため、登校途中にコンビニへ寄るなどの時間の余裕がなくなった。生徒は納得できないと思いつつも、自分たちの意見で変更できるわけがないという気持ちから黙っていたようである。こうした要求実現のためには、学校祭の日程変更を可能にできた経験から、PTAの協力が不可欠であると考えられ、学校生活改善の取り組みを、生徒と教職員だけではなく、保護者や地域にも参加を呼びかけて実現しようとするに至り、「三者懇談会」の開催が決定された。

(3) 協議経過と生徒の要求

①「三者懇談会」の議題

「ここを変えたい**7**項目」がまとめられた時点で生徒会の任期が終わり、この課題は次の執行部へと引き継がれたが、このとき、執行部への立候補者が例年よりも多く名乗りを挙げた。このことから、生徒たちのなかに、自分たちの力で学校を変えることができるかもしれないという思いが強くなっていたことが伺える。そして**10月31日**の放課後、美瑛高校に対してどう思っているのかを聞くため生徒に残ってもらい、「討論・ザ★美瑛高

校」を開くことにした。この会議には2年生が約20人、3年生5人が集まった。ここでは「ここを変えたい7項目」を議題として話し合われた。改善要求の強かった「登校時間を8時40分に戻す」「昼休みの体育館開放」「部活動の活性化」「売店の商品の追加」の4項目については、11月1日の全校集会で生徒会長から実現を目指して頑張るとの宣言がなされた。こうした要求実現の活動は「美瑛高校改造計画」と名付けられ、生徒会を中心として取り組まれていく。

②「三者懇談会」の開催

「三者懇談会」の開催は、さきに述べたような経緯で急遽実施されることとなったが、11月21日に旭川地区に6名、翌22日に美瑛地区で8名の保護者が参加し、それぞれ生徒・教職員を含めて30名弱の懇談会となった。懇談会では、生徒のアルバイトについてなど、生徒が決めた4項目に限らず自由な意見交換が行われた。保護者からは「平日の授業参観には行けないから、土日にやってほしい」、「子どもから意見が出て、保護者はどう思うかすぐ聞ける懇談会はよいと思う」、「入学式のあとにPTA総会があるが、入学したばかりの生徒の保護者に色々言ってもわからない。日を改めてやるべきではないのか」など、日頃から思っていることがあってもそれを出す機会がないということも明らかになった。

③「三者懇談会」によって実現したもの

「三者懇談会」の後、生徒会が改めて「ここを変えたい4項目」を提案し、職員会議で議論された。まず、登校時間の変更について、生徒が落ち着いてきた時期であることや、懇談会での生徒の様子や、保護者からの応援の声があったこと、また、まじめに頑張っている生徒たちを評価する意味でも認めるべきだとすることなど、教職員の率直な意見が出され、元に戻すことが決定された。このほか体育館の開放についても認められたが、部活動と売店については検討課題として残された。部活動について補足すると、美瑛高校では生徒数が少ないために、あまり多種多様な種目、たとえば生徒がテニス部をつくりたいと言っても、なかなか対応できない状況があった。以上の結果が12月3日の全校集会で、生徒会から全校生徒に報告されるかたちで発表された。

2 美瑛高校三者懇談会の現在

(1)「三者懇談会」から「美高フォーラム」へ

①「美高フォーラム」への移行

2005年11月までに6度実施された美瑛高校の三者協議会であるが、実は第1回目実施の時点では管理職も教員も一回きりだと思っていたという。しかし実際に実施してみると三者が同じ土俵で考え、生徒の要求実現以上の中身のある話し合いができたことをうけて、2002年度末反省会議で「三者懇談会」の定着と充実を図るべきであることが訴えられ、年間行事計画の中に位置付けられたのである。それと同時に第2回目以降は「三者懇談会・美高フォーラム」と名称を改めている。

この「美高フォーラム」事務局の中心である波岡教諭が、美瑛高校で三者協議会以外を始めようとした際に参考としたのは、長野県の辰野高校の三者協議会の取り組みであった。辰野高校では「辰高フォーラム」と「辰野高校三者協議会」という別の性格をもった二つの取り組みが行われている。「フォーラム」は学校をあげて行われ、集まってくる人も桁

違いに多い。保護者や地域住民がそれぞれ委員会や分科会を持っていて、そこでレポート発表をしあう場である。それに対して「協議会」というのは生徒、保護者、教員の各機関の選ばれた一部が出席する。その一部の人たちが集まって協議をし、決定するという決定機関である。

現在の「美高フォーラム」は後者、すなわち「協議会」とは明らかに異なっている。ここでは、地域の人たちが思っていることや保護者が思っていることを生徒に聞かせる、生徒は大人に対して自分の思いを伝える、教員は学校側の思いを伝える、という交流しあう場、お互いを理解しあえる場というものをめざしている。保護者や地域住民が委員会などをもっているわけではなく、「辰高フォーラム」とは形態上の差異もあるが、地域住民が幅広く参加できるような組織形態を取っているという点では共通している。

②「美高フォーラム」の開催経過

2002年に1回目の「三者懇談会」が終わった後、波岡教諭と生徒会役員たちは白老東高校の「三者懇談会」を見学し、生徒会同士の交流を経て、美瑛高校での計画を立てていた。

2003年5月15日、16日、「三者懇談会」が「第1回美高フォーラム」と名前を変えて、開催される。この時のテーマは「美瑛高校改造計画」の一環である「授業について」であった。開催は旭川と地元美瑛の2カ所であった。参加人数は旭川地区21人（生徒8人、保護者5人、教職員8人）、美瑛地区27人（生徒11人、保護者4人、教職員7人）である。生徒たちは、登校時間の変更が実現したことから、「入室カードの使い方変更」を求めたが、教師の抵抗感が強く、これでは話し合いにならないので、テーマを広く「授業」とした。しかし、学校への不満が募っていた生徒たちには不満が残ってしまったという。

2003年10月23日、24日に「第2回美高フォーラム」が開催された。参加者は旭川地区19人（生徒8人、保護者5人、教職員6人）、美瑛地区22人（生徒18人、保護者2人、教職員7人）であった。テーマは「美瑛高校をよくするには」で、生徒、保護者、教職員へのアンケートから分析を行ったが、建設的な話し合いには至らず、「美高フォーラム」の行き詰まりを感じさせるものになってしまう。

2004年5月28日、「第3回美高フォーラム」が美瑛のみで開催される。このときの参加者は19人（生徒8人、保護者5人、教職員6人）であり、テーマは「学校生活」「制服」「アルバイト」「ボランティア」などであった。前回の話し合いに行き詰り感があって、教職員の参加も減少し、フォーラム中止も話し合われていた。その一方で、生徒総会の議案討議の段階で「生徒のみなさんに考えてほしいこと」を生徒指導部から生徒に投げかけ、生徒たちの声をまとめて、生徒総会の場で「生徒指導部の見解」を表明する機会をつくり、「美高フォーラム」の話し合いは生徒総会の話し合いをベースにするという流れが確立された。

その上で2004年12月19日、「第4回美高フォーラム」が美瑛で開催された。この時の参加者は49人（生徒23人、保護者7人、教職員15人、地域の方4人）であり、テーマは「これからの美瑛高校を考える」とした。これまで、波岡教諭個人の取り組みに負うところが大きかったが、生徒指導部が分掌の取り組みとして初めて本格的な関わりを持ったフォーラムであった。話し合いの方法も全体討議形式から参加者1人1人の発言の機会が多い分散会討議形式に変えられた。そして、この回からは地域住民にも参加を呼びか

けた結果、同窓会や教育振興後援会から参加者があり、議論に「美瑛高校の歴史的な背景」や「外から見た今日的価値」が加わって、時間的にも空間的にも広がったフォーラムとなったと波岡教諭は述べている。また、この回は生徒総会との時間的間隔が開いていたので、直前にクラスで同じテーマで話し合い、その結果を受けてフォーラムを実施した。このフォーラムで何か結論が出たわけではないが、「もっと色々話し合ってみたい」「次につなげたい」という感想が参加者たちから出された。

(2) 第5回「美高フォーラム」観察記録

①フォーラムの準備状況

「美高フォーラム」事務局は生徒指導部が担当している。現在5人の教員が受け持っており、分散会の司会を務め、まとめを作成している。生徒指導部は、PTAの担当である教務部と連携を取り、PTA役員にも参加してもらっている。その他の保護者の参加については、第一次集約の後、担任が電話がけをして増やしている。

テーマ設定については、当初は保護者に対してアンケートを実施していたが、あまり回答が出なかった。そのため現在は事務局が「生徒が話し合いたいこと」というよりは、「先生が生徒に考えてほしいこと」をテーマとして出しているケースが多い。「生徒に考えてほしいこと」を毎年、生徒総会に向けて出し、生徒にアンケートを取って、生徒総会前のHRの中でクラスごとの意見を作っていくのである。生徒総会で出た意見に対しては生徒指導部で預かって職員会議に出し、職員会議でまとめたことがこの美高フォーラムに返されるという流れができてきている。

第4回フォーラム以降、「どうしたら美瑛高校がよくなっていくか」ということをテーマにしている。その背景は美瑛高校が廃校となるかもしれないという現状がある。先にも述べたように、2005年度の1年生は40人を切ったために「特例2学級」編制となっており、統廃合をまぬがれるためには生徒数を回復していかなければならない。各地域で特色ある学校づくりが行われているが、他の高校のマネをするのではなく、現在在籍している生徒が「この学校へ来てよかった」と思える学校にする別の方法を考え出そうという意図が込められている。

②協議の流れ

2005年6月26日(日曜日)に第5回「美高フォーラム」が実施された。「生徒と保護者、教員、地域住民が率直な意見交換を行うこと」を目的とされ、テーマは「これからの美瑛高校を考える」であった。名札をつけ、体育館に入るとまずアトラクションが始まり、「さよなら、びえい高校」と題された演劇部公演、今年から学校を挙げて行われた「ヘルシーマラソンボランティア」のビデオ上映などが行われた。

開会の挨拶があり、3年生職場実習発表が行われた。その後全体会Iとしてフォーラムの趣旨説明、前回のフォーラムからこれまでの取り組みについてテーマごとに報告があった。その報告を受けてA～Gまでの7グループの分散会に分かれ、生徒もしくは教職員を司会、生徒を記録者とした話し合いが行われた。各グループには生徒会のメンバーを中心に生徒が3、4名、保護者もしくは地域住民が2名、校長・教頭を含めた教職員が2、3名配置されている。討議前半ではグループ内での自己紹介後、「美瑛高校のこれまで、そして、いま」を小テーマとし、何が変わり、何が変わっていないのか、よい点とそうでな

い点を考えることを目的に意見交換が行われた。25分の討議後、各グループの中間報告があり、10分間の休憩をはさんで、後半は小テーマ「これからの美瑛高校」が話し合われた。勉強、行事などと絡めて伸ばしていくべきこと、改めていかねばならないこと、そしてどんな学校にするのか意見を出し合った。その後各グループからまとめ報告があり、全体会Ⅱとして校長から講評、保護者・地域の方からの感想、そして生徒から決意表明が行われ閉会となった。司会進行、受付は生徒が行っており、全体的に時間が少なかったものの、流れはスムーズであった。

③分散会での討議状況

前半は美瑛高校のこれまでの振り返り、現在どこがよくなったか、悪くなったかが話し合われた。よくなった点では美瑛高校のボランティア活動が挙げられ、町がきれいになり、地域の方々の評判もよくなったという意見が多かった。生徒も「地域の人と交流ができていと感じる」「やっつけて気持ちいい」との意見が上げられた。それに対し、制服の着方、私服がよくない(露出度の多いもの、腰パンなど)、交通ルールが悪いという保護者、地域住民からの指摘があった。そのような悪い一面が見えることで美瑛高校のイメージが悪くなり、入学者数が減少しているという地域住民の声も聞かれた。生徒はその勢いに圧倒され、なかなか言い返せない者もいたが、司会の生徒が「入学前は悪いイメージで恐かったが、今は楽しい」と答える場面も見られた。ボランティアについては教員からの「外向きには頑張っている、しかし内側はどうなんだろうか、学校の本体はボランティアではない」という厳しい意見もあった。他にも美瑛高校が活気あるものとならない理由に部活動があげられた。指導者がいない、人数が少ないのでチームとしてそろえることができない、弱い、ということがあるが、一方でバイトや旭川から来ている生徒は早く帰りたいなどの理由も挙げられた。サッカー部部長が「バイトでは得られないことがあると知ってほしい」と訴える部分もあったが具体的な話し合いにまでは至っていない。

中間報告があり、後半は美瑛高校のこれからについて話し合った。美瑛町ともっと交流を持つことを目的に「独居老人に対するボランティアはどうだろうか」などボランティアを増やしていくべきだという意見に対しては、数だけ増やしてもしょうがない、質を高めようなどの意見もあった。加えて花のプランターを置くなどして美瑛町に対してはイメージアップをはかれるが、旭川に対してはどうしていくかということが話し合われた。美瑛高校の行事はボランティアとして参加しているものを含めると道内有数の多さで、生徒数が少ないため、先輩との交流も多い。そのような点をアピールしていくべきであろうという意見から、「まず、旭川の人々に美瑛町に来てもらうにはどうすればよいか」が考えられ、その一つとして学校祭を活性化すべきであるという意見が出された。学校祭では地域との連携をはかることができる可能性もあるのではないかと、「旭川の子供も自分の学校がある、この町のことを知らない」という地域住民の方の意見には全員がうなずいた。

美瑛高校は過去からの悪いイメージをひきずってきており、現在も払拭されているわけではない。しかし、「美高フォーラム」や町でのボランティアの取り組みから少しずつ評判はよくなってきている。美瑛高校は「何をやっているかわからないから評判が悪い」という教員の意見に続き、「いい事を続けていって頑張っているところをみせなければ」という地域住民の発言にも見られるように、これからは地域との連携を強めていこう、そのためには「美高フォーラム」にもっと多くの人に参加してもらわなければならないと議論

が進んだところで分散会は時間切れとなった。時間も短く、全体としての意見の集約もされなかったため、話し合いに関しては不完全燃焼の感否めないが、参加者はみな「美高フォーラム」にはよい評価をしているように思われた。

④第5回「美高フォーラム」についての考察

分散会方式であるため全体会よりは話しやすい雰囲気となっており、どのグループにおいてもおおむね活発な話し合いであったと思われる。やはり2年生、1年生の発言回数は少く、保護者や地域住民の意見に反論できないという場面も見られたが、司会が話をリードしてうまく進んだところが多かった。しかしグループ配分において、生徒会のメンバーは各グループに配分されていたようだが、校長・教頭・PTA 会長などの配分は偏りがあったと思われる。

教員の中には、生徒や保護者の率直な意見を聞き、学校をどうしたらいいかを考えるよい機会になっていると言う者もいる。話し合いをリードする教師よりも「生徒の声を聞きたい」という姿勢で発言も控えめな教師も多かった。他方、校長はとても意欲的に発言していたのは印象的だった。

このフォーラムにおいて決定的に問題なのは時間の短さである。教員は職員会議、保護者はPTA 総会で意見をまとめるなどの準備もなく、いきなりの話し合いであの時間では十分に議論できなかったのではないだろうか。テーマも抽象度が高く、時間に比して多すぎた。もっと精選しておく必要があったのではないだろうか。終盤の議論など、深めていける場所があったにもかかわらず、時間の制限でそこまでいけなかった。

前半と後半の間に生徒がそれぞれのグループの話し合いをまとめて短く報告していたが、その生徒たちの発表の力量の不足は否めず、全体にうまく伝わっているとは思えなかった。加えて、その報告をもとに全体で議論を行う時間は無かったので、議論が中途半端に終わってしまっている。後半では新たなテーマで話し合われたため、前半のテーマについての他のグループの意見を検討したところは少なかったのではないだろうか。これでは分散会それぞれのグループでよい意見が出たとしても全体の議論状況がわかりにくいため、その意見が生かされなくなってしまう。

今後は「美高フォーラム」で出された個々の意見が、後でどう生かされるかが課題となってくる。職員会議、生徒会、PTA にそれぞれ持ち帰られて、改めて検討され、よい提案や取り組みに結びついていけばよいが、現在はまだそれができる状況にはなっていない。また、フォーラムに参加していない者にこれはどのように伝わり、全体のものになっていくかも課題であろう。単なる交流する場、お互いに理解する場としてそれぞれが参考にする程度のもではなく、継続的な審議の中に全体としての「美高フォーラム」としてその存在意義を定義しなおしていく必要があるのではないだろうか。

(3) 第6回「美高フォーラム」観察記録

①協議の流れ

第6回「美高フォーラム」は、2005年11月26日に開催された。前回同様、アトラクションがあり、2005年度上半期の行事紹介と1年生総合的な学習の時間の実践報告、2年生見学旅行の報告が行なわれた。そして、今回は分散会に移る前に、初めてパネルディスカッションが行われた。

パネルディスカッションのパネラーは、美瑛町長、商工会事務局長、PTA 会長、美瑛高校校長、2005 年度前期生徒会長、同年度後期生徒会長の 6 人で、コーディネーターは波岡教諭が務め、テーマは「どうする美瑛高校!？」であった。

それを受けて、事前に割り振られていた 7 人程度の 8 つの班に分かれ、生徒会役員の生徒がそれぞれの班で司会をして討議が行なわれた。テーマは「どうする美瑛高校!？」の中でも「地域との結びつき」と「中学生や地域へのアピール」という点に絞って行なわれた。これには、パネルディスカッションもあり、前回より話し合う時間が短いために議論が発散しないようにする意図があった。また、このテーマは事前に行なわれた生徒のアンケート結果で、最も多かったテーマだということである。

最後に、まとめとして各班で記録をしていた生徒が討議内容を報告し、校長による「講評」、保護者、地域住民、見学した大学生（われわれ）の「感想」が述べられ、生徒の「決意表明」が行なわれた。

②パネルディスカッションの討議

波岡教諭は、「開かれた学校づくり」とは「開く」、「つくる」、そしてその「結果」の 3 つ全てを指すのだと言っており、今回の「美高フォーラム」は「つくる」過程の第一歩としての位置付けであるとしている。そこで、存続の問題を「真正面から」考えるために町長や商工会事務局長を交えたパネルディスカッションが行われることになった。

「どうする美瑛高校!？」というテーマで行なわれたが、なかでも美瑛町と美瑛高校の関わりが論点として挙げられる。それについて町長は、「美瑛町で美瑛高校の応援団を作ろうとして」いる、ということ述べて、町を挙げて美瑛高校を盛り上げていこうということをしようとしているのだとアピールしていた。また、校長は「美瑛町にたった一つの高校」であるということを生かしきれていないと述べ、例えば独居老人の訪問などのボランティア活動が出来るのではないかと述べていた。

美瑛高校の生徒数が少なくなっていることに関しては、その利点を強調する発言とどう増やしたらいいかという二つの側面から発言がなされた。校長は学校にとって生徒が少ないということが悪いことではないと述べた上で、その理由をこう述べた。「一人あたりの先生に対する生徒の数が少ない」ので、「限られた力を少ない生徒に向けられる」として、小規模校の利点として一人ひとりに対する質の高い指導ができるということ挙げた。次に二つ目の側面として、PTA 会長から「普段の社会的活動」を「美瑛高校の一つの特色として」「土曜日に特別授業として」やってみたら面白いのではないかという意見が出された。

一方で、商工会長からは、学校というところは「知識の習得に励む場所」である、「社会のゴールに向かって出発するときの（教養の）ボーダーライン」を身につけて欲しい、というような発言がなされ、校長や生徒たちとは異なる視点から学校教育のあり方、美瑛高校への期待を述べていた。

後期生徒会長から、「生徒参加は美瑛高校の特徴」、「みんなで何が必要かを考える」場所である「美高フォーラムで発言」してみんなで美瑛高校を変えていこうという発言がされた。

③分散会での討議

分散会での討議に関しては、前回（第 5 回）と同様の形式で行なわれた。パネルディス

セッションがあったので、その分だけ時間が短くなっていた。しかし、テーマが絞られていたし、パネルディスカッションの影響で議論の下地を共有できたという面があり、前回よりもいい議論が出来ていたように思われる。

④第6回「フォーラム」についての考察

今回の参加者は約60名で前回よりも若干名増えている。特に、生徒会長として「美高フォーラム」に関わっていた卒業生が参加していて、パネルディスカッションのときにも質問していたのが印象的であった。このような形で、フォーラム自体が拡大していくというのは望ましい方向であると思われる。

一方で、現役の生徒や保護者、教職員の参加は伸び悩んでいる。保護者からは「実行に移せ」という声が寄せられており、「美高フォーラム」に参加することで学校づくりに参加できるという具体的な実感がなければこれ以上の参加者の拡大というのは望めないのかもしれない。もちろん、広報活動なども大事ではあるが、それにも増して、このフォーラムで出た意見をどのように具体化していくかということが重要になっていくだろう。

前回のフォーラムから今回のフォーラムの間で具体化されたことは、ほとんどなかったと言っていい状況である。例えば、生徒から「教職員と距離を感じる」という声があり、学校行事に「教職員チーム」が参加して欲しいという要望があったが、それも12月の冬季球技大会にはということになっているようで、7月の夏季球技大会、美高祭、10月の体育祭では実現されていない。そのほか、毎回抽象的なものから具体的なものまで、数々の提案が分散会のそれぞれの班でなされているが、それに対して教職員は明確な回答を提示していない。こうした点で、保護者や地域住民は、参加することにそれほど多くの意義を見出しえていないように思われる。

また、分散会で書記を生徒に任せていることにも問題がある。これらの生徒は、何を書き取っていいのか迷っている姿が少なからず見られる。そして、書くことに精一杯でうまく議論に参加できていないのが現状である。分散会での意見を集約し、確実に教職員がそれを拾い上げて学校づくりに役立てていくためにも、生徒が議論にきちんと参加して発言することで学校づくりに参加していくためにも、教職員または保護者、地域住民という大人側が、しっかりと議論を書き取っていく必要があるのではないだろうか。そうしなければ、せっかく分散会の形をとってそれぞれが意見をいいやすい環境をつくっている意味が薄れてしまう。

あわせて、司会を誰が務めるかということも考えていく必要があるように思われる。もちろん美高フォーラムは生徒を中心にした行事として学校の中で位置づけられているということは大事である。しかし、それと運営を全て生徒が行なうということは別なのではないだろうか。生徒会の役員を務めている生徒が中心に各班で司会を行なっているが、中には議論が脱線したときに軌道修正が出来なくて困っている生徒や、あまり発言をしない1年生や地域住民に対してうまく発言を求められない司会の生徒が見受けられる。生徒の成長の場としての意義はもちろん認めなければならないが、まずは意見を堂々と述べられるようにするというところに重点を置くことが求められる。

このフォーラムは、生徒の一部、教職員のごく一部、保護者のほんの一部しか参加していないというのが偽らざる現状である。しかし、何回も参加している保護者の方が、「だんだんレベルアップしてきている」と述べているように、発展途上のものである。参加者

を増やしたり、教職員同士、PTA内部など、フォーラム以外での協議を増やすなどによってさらに発展が期待される。このフォーラムを中心にした自治の裾野の拡大が求められている。

(4) 生徒、保護者、教員の「美高フォーラム」評価

ここでは、2005年6月16日に美瑛高校教頭、波岡教諭に対して行ったヒアリングと6月26日に美瑛高校で開催された第5回「美高フォーラム」終了後、参加していた生徒、教員、保護者、地域住民に対して行ったアンケートをもとに、それぞれが「美高フォーラム」をどのように見ているのかについて述べることにする。

①教頭ヒアリングから

美瑛高校教頭は、「美高フォーラム」は「本当に自由にいろんな気持ちを表現でき、自分の意思を表す場」であり、その意味で「大変貴重な場」であり、「非常に有効な場」であると肯定的に捉えている。

教頭のみから見た美瑛高校の生徒は、いろんなことをやるように言ったときに、積極的にできる生徒は少ないと映っている。ただ、生徒には「やりたいという気持ち」はどこかにあり、それを「どう引っ張り出していくのか」が教員の力量であり、「そういった場を上手く作っていくのが我々大人の仕事でもある」と考えている。これがうまくいけば、「子どもたちはどんどん自分たちでやっていけるようになる。「美高フォーラム」にはこうした生徒の気持ちを引き出す役割が期待されている。

また、学校の存続問題を抱える美瑛高校にとって、「美高フォーラム」は地域住民に学校が何かやっている、それは何なんだろうとか、生徒たちはいま何をやっているんだろうと、美瑛高校に関心を持ってもらうための一つの機会になることが期待されている。美瑛高校の存続に関わって、「やっぱり学校が地域住民に信頼されていなければならない」と教頭は述べている。

「美高フォーラム」の今後の課題としては、生徒会を中心とした子どもたちは一生懸命やっているが、一方で全校的な広がりにはまではなかなか進んでいかない点をあげている。

②教員ヒアリングとアンケートから

ここでは、「美高フォーラム」の運営の中心的な役割を担っている波岡教諭に対して行ったヒアリングと第5回「美高フォーラム」に参加していた教師8名に対して実施したアンケートをもとに、教員が「美高フォーラム」をどのように見ているのかについて述べる。

波岡教諭が「美高フォーラム」を始めようとしていたときは、周りの教員からなかなか「理解が得られない」ということがあった。そこには、「学校の秩序っていうものを全部ひっくり返すような要求が出てきたらどうするかということをしごく恐れている」状況があったためだという。しかし現在は、生徒や親の声を聴こうということに対する「抵抗」は減ってきており、生徒と一緒に学校やクラス、授業を作っていくことに理解が得られるようになってきているという。それでも、苦勞しているのは、教員をどうやって参加させるかと、親を集めることであるという。

また、波岡教諭は、「美高フォーラム」を今後「協議会」に発展させることが課題だという。「今、三者懇談会の、美高フォーラムの到達点っていうのは意見交換」であり、「美高フォーラム」は「決定機関ではない」ため、生徒から「いつまで話してんの」、「もう決め

てよ」という批判があるという。そこで、生徒と保護者と教員、あるいはこれに地域を加えて四者で学校を具体的にどう作っていくのかを提案でき、決まったことをそれぞれが実行するというような組織にしなければならないという。

教員アンケートでは、全員が「美高フォーラム」について「意義がある」と回答し、今後「継続・発展させたい」と考えている。「具体的に何をしてほしいのかがわかりやすくなった」、「意見を出し合う場ができたことから、お互いに聞く機会が増えた」という意見がある一方で、「言いたいこと全部言えているとは思えません。度胸のなさも出ますね」、「出席してくる生徒は積極的であると思いますが、出席者が固定されてきていると思います」といった意見もある。今後の課題が参加者を増やすことと意見が出しやすい体制を整えることだと感じられる。

③生徒アンケートから

生徒アンケートは、第5回「美高フォーラム」に出席していた22名を対象に実施した。

まず、「三者懇談会は有意義だと思いますか？」という質問に対しては、無回答3名、「わからない」1名、「思わない」1名以外は、三者懇談会に対して肯定的な意見であった。「今後も継続してほしいですか？」という質問に対しても、無回答1名を除き、「周囲の人の意見を聞けるので継続していったほうが良いと思う」というように継続を望む意見がほとんどであった。

しかし一方で、「三者懇談会に生徒はみな関心を持っていますか？」という質問に対しては、「あまり持っていない」という回答が「持っている」を上回り、「持っている人と持っていない人が分かれています」という生徒の見方がこの質問に対する生徒の実感であると思われる。

④保護者アンケートから

保護者アンケートは、第5回「美高フォーラム」に出席していた9名を対象に実施した。

保護者も教員同様、「美高フォーラム」を有意義だと捉え、継続してほしいと考えている。保護者に関する今後の課題としては、「保護者の参加者が少ない、参加者がほぼ決まっている」という意見に集約されるだろう。「美高フォーラム」に関しては、「学校では各家庭にプリントが配られてはいますが、プリントだけでは内容がわかっていない方もいます」、「参加者を増やすためにPRを少ししたほうが良いです」というように、参加していない保護者にどれだけ訴えていくかが重要になる。また、「一部ではなく全体、全員の意見を聞きたい」ということもあげられている。

⑤地域住民アンケートから

地域住民アンケートは、第5回「美高フォーラム」に出席していた4名を対象に実施した。

地域住民も、「美高フォーラム」を有意義であり継続してほしいと考えている。「成果はすぐ出ているとは思えませんが、継続していくことが大切だと思う」という意見は、「開かれた学校づくり」において重要な指摘である。

今回の地域住民の参加者は4名と少なかったが、「美高フォーラム」の存在は、「一部のみにしか伝わっていないと思う」というように、保護者と同様に「美高フォーラム」の存在が地域住民の方にも十分伝わっていないのが現状のようだ。参加者を増やすためにも、どのように「美高フォーラム」を学外に発信するのかが今後の課題である。

⑥アンケート総括

以上のアンケート結果を簡単に総括すると、参加している生徒・保護者・教員・地域住民のそれぞれが「美高フォーラム」を有意義な場として捉えており、今後も継続すべきだと考えている。そして、この四者のそれぞれが、参加者が固定しており、関心がある人が限られていると感じ、参加者を増やしたいと考えている。そのためには、PR活動も重要だが、波岡教諭が指摘するように、「協議会に発展できるかどうか」が今後の鍵になるのではないだろうか。「美高フォーラム」はそれぞれの立場から意見を言ってお互いを理解するという段階から次の段階に差し掛かっている。「美高フォーラム」が決定機関になることは難しいとしても、何らかの形で話し合われたことが、目に見える形で実現するようになれば、「美高フォーラム」に対する期待は高まるだろう。

3 「美高フォーラム」の意義と課題

最後に、「美高フォーラム」の意義と課題についてまとめると、大きく以下の二つのポイントがある。

まず、学校をよりよい場所にしていこうとする取り組みを、教職員と生徒だけではなく、保護者や地域の人たちを加えて話し合うことが第一のポイントである。学校の運営については、これら三者あるいは四者が、常に連携を取り合うことが理想ではあるが、高校の場合、とくに美瑛高校のように、遠くから通う生徒が多いケースは、学校と保護者及び地域が緊密な連携をとることは困難である。このため、あるテーマに基づいて、三者または四者が一堂に会して話し合う場を設定し、学校運営のなかに位置付けることの意義は大きい。それは、学校生活の様子を説明するだけでなく、学校運営にそれぞれが協力するための基盤としての共通理解を形成しうる場となるためである。

とはいえ、このポイントに付随する課題として、地域・保護者からの参加者が少数である上に固定された顔ぶれしか参加していないという実態がある。フォーラム自体への参加以外にも、生徒がヘルシーマラソンへ参加したり、地域のプランター作りに関わったりする中で、地域の人たちとの接する機会がある。これらの声を、どのように学校改善の取り組みに生かしていくことができるかが課題となる。

二つ目のポイントは、「美高フォーラム」は、学校生活の改善点を明確化して、その実現へ向けてどうすればよいかを考える場ということである。対話によって学校課題を共有し、その改善策を共同で考え出そうという活動である。これは一種の学校評価活動ととらえることもできるが、お仕着せの学校評価でもなく、評価のための評価活動でもない。当事者にとっての望ましい学校のあり方を探り、実現していくための活動である。

しかし、第6回「美高フォーラム」の前に、保護者から「フォーラムで話し合われたことが、あまり実現されてきていない」という声があがっていた。現在の「美高フォーラム」での議論は、三者が集まってそれぞれの意見が交換されているが、決定機関ではない。教員ヒアリングでも「美高フォーラム」を決定機関にできるかどうかは課題として挙げられているが、「美高フォーラム」自体を決定機関とすることは必ずしも必要ではない。ただ、「美高フォーラム」で話し合われたことを、実現させていく手続きを今後いかにして学校運営体制に組み込んでいくかは課題として残っている。

終章 三者協議会実践の発展方向

1 2つの実践のまとめ

(1) 白老東高校「三者協議会」

これまで見てきた白老東高校の「三者協議会」と、美瑛高校の「美高フォーラム」という2つの事例を整理すると、以下のようなろう。

白老東高校の取り組みは、三者協議会のきっかけとなった「生徒が言いたいことを言えていない」という言葉に表されるように、「三者懇談会」は生徒の意見表明の場としてスタートした。当初は、保護者らに生徒たちが「しゃべりたおされた」という状況であったが、徐々に生徒たちも生徒間でアンケートを実施したり、事前に生徒側で作成した携帯電話などの使用ルールの案を提示したりして、自分たちの意見を表明していった。

白老東高校の教員たちの多くは、協議会への参加やその準備を通じて生徒たちが交渉や段取りの方法を身につけていくという点に意義を見出している。加えて、2002年以降のテーマとして「授業」が取り上げられるケースも出ており、「何のために勉強するのか」ということにも及ぶ議論が生まれている。三者協議会を通じて生徒・教員間で豊かな学びのあり方を模索していく動きも見られ始めていることは、注目すべき点であった。

2004年に「三者懇談会」から「三者協議会」へと改組するにもなって会則が定められ、三者間でルールを共有することが明文化されたことは重要な変化であった。これにより協議機関としての「三者協議会」の位置付け（「会則」第1条）がより明確にされることになる。ひとつのルールが三者間で制定されることは、民主的な討議の場が保障されるということと同時に、討議の中での生徒、教員、保護者という参加者の役割が明確になることを意味している。すなわち、生徒は学校生活に対する意見を表明し、教員たちがそれを正面から受け止め、そして保護者たちがそれを励ますという枠組みが近年整えられつつあることが看取できた。

三者間の合意の下で協議ルールを制定したということは、白老東高校の取り組みが次の段階へと移行したことを示しているといえよう。しかしその実態は必ずしも大きな進展を見せていないというのが現状であった。参加者も従来以上に広がる状況にはない。

「三者懇談会」から「三者協議会」へ移行しても、生徒の成長・発達に資することが主眼であることはかわらない。そのことの意義を承認した上で、その教育的まなざしとでもいうものが過度に生徒たちを囲い込むようなことに陥らず、あくまで生徒が1人の人格として育っていくように支援するものであり続けることが求められる。白老東高校「三者協議会」の事例からは、三者協議会に生徒の成長を促す教育的機能と学校当事者間の協議・決定システムとしての機能という二重の機能があることが看取された。同校協議会にその2つの機能があることをまず評価するが、それとともに、この2つの機能のいずれもが欠けることなく三者協議会を実践していかねばならないという難しさも指摘しなければならない。白老東高校の事例は、三者協議会というものがこうした教育と意思決定という二重の機能の調整という課題をたえず迫られ続ける存在であることをあらためて考えさせてくれるものであった。

(2) 美瑛高校「美高フォーラム」

美瑛高校は、「美校フォーラム」の前身である「三者懇談会」の中で、登校時間の変更や体育館の開放が認められたことからわかるとおり、生徒たちの学校生活に直結した問題が当初議論されてきた。その後、「美高フォーラム」へと変遷した後も、議論のテーマは、第1回が「入室カードの扱い方」・「授業」、第2回が「美瑛高校をよくするには」、そして第3回が「学校生活」・「制服」・「アルバイト」・「ボランティア」と設定されてきた。このように、第3回のテーマの「アルバイト」と「ボランティア」を除いては、以前の流れ——学校生活に直結した問題——によるテーマ設定と大きく変わるものではなかった。

しかしながら、第4回になると「これからの美瑛高校を考える」と題して議論が行われ、同窓会や教育振興後援会からの参加がみられるようになった。この回以降、「地域」からの参加者というカテゴリーが追加されており、これを機にフォーラムが次の段階に移行したと見ることができる。

「地域からの参加がある」と言っても、その人数は毎回5、6人であるが、フォーラムでの議論をきっかけに、生徒たちが地域でプランターを作ったり、ヘルシーマラソンに参加し協力したりするなど、新たな動きが見え始めている。また、生徒たちはフォーラムの中で、これまで地域住民に抱かれてきた美瑛高校にたいする「偏見」を払拭したいと思っており、そのためには生徒が地域の行事に参加していくことも必要だと自覚し始めている。

そうした新たな取り組みに至った背景に、美瑛高校の存続問題が横たわっていることは先述の通りである。だが、地域とのつながりという観点を明確にしたことで、結果として今回のフォーラムのパネルディスカッションに町長がはじめて出席したことにもつながっており、美瑛高校の「美高フォーラム」には、地域の中の学校を目指そうとする萌芽が見られるようになってきた。

もっとも、分散会形式を取る「美高フォーラム」は、意思決定という面から見ると十分な機能を果たしているとはいえない。学校当事者各層の意見をまとめ、何らかの明確な意思決定を行って、実行するための媒介環としての役割はかなり不十分である。参加者からは対話することの意義を認めつつも、何かを実現する段階、「つくる」段階にそろそろ進むべきではないかという声が生まれていた。「美高フォーラム」は、地域的な広がりをもつという発展を示したが、それをどう学校課題の克服につなげていけるかが問われている。

2 2つの実践の比較から

(1) 実践の軸足の置き方

このように2校の協議制度は、学校祭のあり方についての生徒の意見がスタートになったこと、長野県の辰野高校の取り組みを参考にしていること、そして参加者の少なさが課題となっていることなど、共通する要素も複数見られた。にもかかわらず、結果的にそれぞれ軸足の置き方や、目指すべき方向、協議の進め方などが少なからず異なっていたことは既述のとおりである。それは、一方の白老東高校が共有されたルールの下での生徒自身の内面的な成長を期待する「教育的効果」という点に、他方の美瑛高校は学校の存在意義を自問する中で「地域の中の学校」をどう目指すかという点に、それぞれ実践の軸足を置いていた。

無論、この両面はそれぞれ補完的に協議制度を構成する要素となっており、どちらか一

方にしか存在していないとか、どちらか一方が望ましい、という類のものではない。しかしながら、その差異はそれぞれの学校がおかれている所与の条件に左右されてはいるものの、今後の協議制度の発展の方向性を考察する上での一つの視点となるだろう。

（２）三者協議会の発展方向

両校はともに、地方中心都市の隣接自治体におかれた小規模校である。いずれも中心都市から通学する生徒が多数を占める。生徒の進路も大学進学は少なく、専門学校進学と就職が多いという点で共通する。

学校の置かれている位置にこうした共通性があり、また教員の主導性によってともに始まった三者協議会であるが、上述のような実践の軸足の置き方の差異が生まれたことについて、主導的教員の志向性の違いも1つの要因として考えられるが、ここでは学校の置かれている文脈（存廃問題の深刻さ）の違いによるものとしてまずは把握しておきたい。

美瑛高校は2学級校であるが、先に触れたように2005年度入学者が40人を切った。生徒数の減少という点で美瑛高校の方が深刻な状況にある。美瑛高校と地域との関係はこれまであまり密接ではなかったようである。1948年に定時制農業科として開校し、その後全日制普通科とともに定時制生活科を付加していった同校は、戦後北海道に多く生まれた農村青年のための高校であった。しかし、道立に移管され（1963年）、全日制普通科のみ的高校となる（1983年）にしたがい、次第に地域との結びつきは希薄化していったと思われる。私たちのインタビューに対して美瑛町教育委員会教育長は、「道立高校は敷居が高い、かつて校長に会いに行ったときも冷たくあしらわれた」と語っていた。道立高校が地域から超然として構え、地域の側もその高校を自分たちのまちの高校とは考えなくなる。こうした高校と地域の関係ができあがると、保護者や地域住民が子弟を隣接中心都市の高校に通わせるようになり、また都市部からはじかれた生徒たちが流入してくるようになるのは必然である。美瑛高校に行くぐらいならたとえ高い学費と通学費を払ってでも旭川市の私学に行くというのが中学生とその保護者たちの意識の隠すことのできない現状である。

しかし、「美高フォーラム」は、こうした高校と地域関係を再構築するものとして動き出している。主導する波岡教諭は、高校は地域に開き、地域とともにつくるものと述べている。美瑛高校の最近の歴史の中で、地域との関係づくりを学校がはっきりと述べたのは、これが初めてではないかと思われる。「美高フォーラム」によって、美瑛高校は新しいステージにのぼりつつあるといえよう。

美瑛町と同じように旭川市に隣接する上川町に道立上川高校がある。同校もやはり旭川市からの入学者の流入現象（＝町からの流出現象）が見られるが、数年前から連携型中高一貫教育を導入し、町からの生徒の流出を押しとどめてきている。それが可能になったのは、連携型中高一貫教育の導入を契機として、町が上川高校のバックアップに立ち上がったからであり、町の支援を背景に高校が町立中学校と結んでさまざまに豊かな教育実践を展開することで、町民からの信頼を得ることに成功を収めたからである。町は道立高校をも視野に入れ、地域で高校まで子どもの成長を見守り、保障するという姿勢に立ったことが町民にも伝わっている。

上川高校と美瑛高校では、同じ都市周辺にある道立小規模高校でありながら、入学者に

占める町内出身生徒比率には大きな差異がある。それはやはり高校と地域との関係が大きく異なっているからだと考えられる。美瑛高校はやや遅きに失した感はあるが、「美高フォーラム」で町長らを招いたパネルディスカッションを企画するなど、これから地域との関係が大きく広がる可能性を開いている。

他方、白老東高校の「三者協議会」は、保護者を含めた学校構成員の意思決定機関としてデザインされている。同校の協議会が、参加者の狭さは残るものの、集中的な討議を行うという点では体制的に整備されていることは先に見たとおりである。しかし、この特徴と関係していると思われるが、学校が地域との関係をもつための連携機能はもっていない。これが「美高フォーラム」との大きな違いである。白老東高校の管理職（元校長宮崎氏）は地域を巻き込みたいという意向をもってしたが、これに対して主導的教員からは「地域を入れるのはまだ早い」という見方が出された。同校の「三者協議会」の組織と実践は、フォーラム的側面よりも意思決定機関としての側面が強く、ここに地域住民を位置づけるのは確かに難しい部分がある。しかし、その分、地域との関係構築と支援を引き出す媒介機能は弱く、生徒を教育する場としてとらえられる傾向が見られる。

白老東高校も今日の少子化のもとでいつ学級数の削減が訪れるか分からない状況にある。地域からの信頼を得ることはやはり同校の未来にとって不可欠である。また、同校の「三者協議会」では授業もしばしばテーマにとりあげられているが、こうした議論を授業方法論で終わらせず、カリキュラムづくりにまで実践を進める必要があるのではなかろうか。その際、本物、現実を子どもたちに見せ、考えさせていく実践が求められるが、そのためにも地域からの支援は必要である。

意思決定としての機能、生徒たちへの教育的機能は白老東高校「三者協議会」によりよく見られる。ただ、美瑛高校「美高フォーラム」には地域を学校の存立と教育実践の豊富化の基礎に据えて学校づくりを進めていける展望が生まれており、大きな可能性を宿していると評価したい。もっとも、それはいまだ可能性にとどまっているのであるが。

三者協議会実践には、その本来のねらいでもある学校構成員の民主的な意思決定を重視するタイプと、学校に関わる広範な人々の参加を得て学校づくりを進めていこうとするタイプの2つが見られた。意思決定と地域連携のどちらが重要というわけではなく、いずれもが必要なのである。三者協議会と地域フォーラムの2つを当初から備え、生徒たちの要望を受けて総合選択制の導入という学科＝教育課程改編にまで至った辰野高校の実践にはあらためてその先進性を感じざるを得ない。

全国に小さな点としてまばらに生まれてきている三者協議会実践が、昨年度私たちが調査した奈井江町の「子どもの権利条例」のような地域レベルでの教育・子育て実践と連動すれば、地域の教育と子育てはより大きく発展していくものと期待される。

[付記] 本調査の実施に当たって、序章の調査経過に掲げたみなさまにはこころよくインタビューやアンケートに応じていただき、また両校には三者協議会の視察と参加を認めていただいたことに厚くお礼申し上げます。

*本調査は、2005年度北海道大学教育学部授業「教育行政学調査実習」として実施したものである。調査には、本報告書執筆者以外に、坪井由実（北海道大学大学院教育学研究科教授）、

篠原岳司（同研究科修士課程 2 年）、小林勇樹（同研究科修士課程 1 年）、藤田春香（同教育学部 4 年）が参加した。

【参考資料・文献一覧】

飯塚正樹「「三者懇談会」から「三者協議会」へ」（日高教・高校教育研究委員会、太田政男、浦野東洋一編著『高校教育改革に挑む 地域と歩む学校づくりと教育実践』ふきのとう書房、2004）

浦野東洋一『開かれた学校づくり』同時代社、2003

田久保清志「高校の二者協議会と三者協議会 ―〇道府県のアンケート調査の結果から―」『高校のひろば』通号 36、2000

波岡知朗「「美瑛高校改造計画」と学校づくり」『教育』通号 689、2003

波岡知朗「「美高フォーラム」で変わる私たち」（前掲『高校教育改革に挑む 地域と歩む学校づくりと教育実践』）

日高教・高校教育研究委員会、太田政男、浦野東洋一編著『高校教育改革に挑む 地域と歩む学校づくりと教育実践』ふきのとう書房、2004

北海道高等学校教職員組合自主活動検討委員会編「いま「地域」と「高校生」に求められている「学校づくり」とは」『北海道高教組情報』号外 No.12（2005.3.6）

北海道高等学校教職員組合自主活動検討委員会編「今を生きる高校生とともに学校をつくる」『北海道高教組情報』号外 No.12（2005.3.19）

宮下与兵衛「辰野高校の三者協議会とフォーラム」『教育』通号 638、1999

宮下与兵衛『学校を変える生徒たち』かもがわ出版、2004

宮下与兵衛「わたしたちの学校づくり宣言」と「生徒・父母・教職員の三者協議会」のとりくみ『高校のひろば』通号 28、1998

『「開かれた学校づくり」全国交流集会 in 苫小牧（北海道）報告集』2003

飯塚正樹「生徒の“声”を軸にした“学校づくり”～憲法・教育基本法・子どもの権利条約を生かした教育実践の創造を目指して～」（第 25 回 道央ブロック 教育入門講座）

飯塚正樹「「三者懇談会」から「三者協議会」へ」（「開かれた学校づくり」全国交流集会 in 苫小牧 全体会（シンポジウム）関連資料）

高橋良典・吉川龍司・青木尚大・西田真由・南佳菜・保科希美〔生徒〕・波岡知朗〔教員〕「私たちが変わる「美高フォーラム」」（「開かれた学校づくり」全国交流集会第 1 分科会レポート）

「2003 年度 第 2 回美高フォーラム」（「開かれた学校づくり」全国交流集会第 1 分科会レポート《資料》）

波岡知朗「“さよなら、びえい高”をこえて ～美高フォーラムのとりくみ～」（2005 年度 合同教育研究善導集会レポート 第 17 分科会 子ども、父母参加の学校づくり）

波岡知朗「「美高フォーラム」で変わる私たち」（第 25 回教育実践講座 課題別 2「学校づくり クラスづくり」分科会レポート）

【白老東】

北海道白老東港等学校『平成 17 年度学校要覧』

『白老東高校のより良い学校づくりをめざす生徒・保護者・教職員の三者協議会』会則
生徒指導部「第 2 回 校内研修会 服装・頭髪に関する全校アンケート」(2005.6.13)

『白老東校だより』第 40 号 (2000 年 3 月 24 日)

『 同 前 』第 47 号 (2001 年 7 月 30 日)

『 同 前 』第 49 号 (2002 年 7 月 31 日)

【美瑛】

「2005 年度後期 生徒総会」(2005 年 10 月 26 日)

生徒会「交叉方位」No.1 (2005.11.1)

生徒会執行部「交叉方位」第 2 号 (2005.11.2)

北海道美瑛高等学校生徒会機関誌『美峰』No.30、2003

『同前誌』No.31、2004

『同前誌』No.32、2005